会長挨拶

日本ハンドボール協会長

鈴木達雄

この度日本ハンドボール協会の会長に就任する事になりましたのは全く自分でも予想外の事でありその責任の重大さを痛感する次第であります。

全くのスポーツマンでもなく、看板になる様な有名人でもなく、資金的な面で有能とも言えない、しかも表面に出る事の大嫌いな、私が何故に会長を引受けたか、全国の皆さんも不審に思われるでしょう。又私をよく知っている友人等は全く驚く事でしょうし、気でも変になったのではないかと心配する事でしょう。

偶々私の会社で六年ほど前女子チームを編成したのが縁で三年前副会長に推されました。当時式場会長の下に三名の副会長が居られ、私は四番目の副会長として唯名前を連らねるだけとの事でした。所が間もなく出口氏が辞任され、又昭和四十年の末には会長の式場先生が亡くなられ、東京在住の唯一人の副会長として適当な会長の選ばれる迄会長代理を引受ける事になりました。

当時は高嶋氏も理事長として健在であり、私は何等表面に出る事もありませんでした。所が昨年の十二月七日高嶋理事長の突然の辞任から問題は大きく発展しました。十数年間理事長として殆んど独裁的にハンドボール界を引張って来た高嶋氏の意外な辞任ですから、その反響は大きく、混乱は混乱を生み、色々と新聞種にもなり皆さんにも御心配をかける結果となりました。

これより前、昨年の秋の評議員会で、会長選衡委員会が作られ、色々の候補が上げられ、交渉もして来ましたが、その内に協会自身がこの困難を切り開く責任あり、他人に依存するべきでないとの考え方が圧倒的になり、偶々会長代理をやっていた関係上私が引受ける事になりました。

又私自身としても何とかこの混乱を収め、軌道に乗せた上でもっと適格な方に会長になって頂く責任ありと判断し、敢えて会長を引受けた次第であります。

従って会長としての方針は以上の経過から、

協力体制

協会内部の結束を固める事を最大の目標としました。個人能力より協調に重点を置き、一部一派に片寄らないよう注意しました。そのため会長推薦理事については三月十九日の理事会に於て、学連、高体連、実業団の三団体と地方協会の代表に執行部代表を加え、選衡委員会を作り十六名の理事候補の推薦を得、更に副会長と相談の上、従来の常務理事については、常務理事会への出席率、（協会に対する熱意）を参考とし、出身校についても出来るだけ片寄らないよう注意の上、十名選任しました。

副会長の選任

本部協会の独善独走とならないように、学連、高体連、実業団の三団体と地方協会との緊密な連絡を計り、ハンドボール界全体を一丸とする目的の下に三団体並に地方代表として最もチーム数の多い東京、大阪、愛知から副会長の推薦を御願いしました。特に条件として実力者の参加を要求しました。その結果、

学連―西敏郎氏、高体連―児玉九十氏、東京―渡辺和美氏、愛知―小杉仁造氏、大阪―馬場太郎氏の五名の副会長が決定しました。又上部団体たる体育協会との連絡を密にするため特に体協理事であり、国体副委員長である保坂周助氏に副会長就任を願いました。

常務理事の選任

常務理事についても、同様に連繋に重点を置きました。

学連―荒川清美氏、高体連―徳永陸繁氏、実業団―数原洋二氏、関東―入江暢一氏、東海―栗脇嶷氏、近畿―山田計氏。

以上の体制は本部協会の独走を防ぎ、各団体、各地方協会のための本部でありたい願いからであり、又ハンドボール界の一体化を

望むためであります。従って一部協会規約に反する点もあり、この非常時を乗り切るための大目的のため、特に便法として評議員会並に理事会に特別の了解を求め実施する次第であります。

組織化の完備

会社でも、団体でも、規模が小さく発展の初期にあっては、責任者の独断専行が効果を挙げる場合が大きく、当ハンドボール界も高嶋氏の如き有能な理事長の独裁で大きく発展しました。この意味に於ては大旨成功と言えましょう。しかし段々と発展し、今日のような規模になりますと色々と欠陥が出て来ました。これが色々の批判となり、非難となり、今回の騒ぎの有力な原因となっています。従って、是非とも協会の組織化を完成しなくてはなりません。それには常務理事は各自夫々の部門を分担し、これに対する権限と責任を明確にし、計画、予算、実行、決算等を明確にしなければなりません。

金の面は一切会計又は理事長任せでは責任を果した事になりません。又各部で委員を選び、若手の登用、養成を計ると共にその部の完全なる計画の樹立、実行を御願いします。

人心の一新

これだけの混乱の後ですから、この際人心の一新が必要です。十数年に及ぶ理事長歴任の結果、マンネリに陥ったり、派閥とは行かない迄も片寄った人事になりがちです。従って思い切った人事の変更と新人活用による新しい空気を入れる必要があります。

そのため、理事長始め、審判、技術、普及、会計、会報等各部に亘り部長の交代を御願いしました。但し全面的な変更ですから失敗や不手際を起す恐れもありますので、的場、若崎の両ベテランに特に無任所常務として新理事長始め、各担当常務の補佐監督をお願いしました。

会計制度の確立

今回問題の起った大きな原因の一つに会計制度の不備が挙げられます。小規模の場合は小遣帳でも、大福帳でも結構間に合い、又会計を完備するためにあまり多額の金を掛ける訳には行きません。しかし規模が大きくなるにつれ、整備して行きませんと問題を起しやすくなり、同時に資金の効果的な運用は出来ません。

当協会も従来の経過を見ますと、執行部の理事は全く気の毒な程、時間的にも、経済的にも大きな負担を負って頑張っていながら、一方に於て今回のような問題の起った大きな原因はここにあります。尚誤解のないよう申し上げますが、今回問題になったのは特に会計の不備であった頃の不明確さにあっただので、最近は何等問題はありません。今後これを一層整備し、実際に必要な経費は出来るだけ個人の負担にならぬよう注意し、寧ろ会計制度を整備する事によって無駄を省き、資金運用の公平化、効率化を計りたいと思います。

又各団体、各地方に対しても、還元すべきものは還元する事により、夫々活発な活動を促し効果を挙げたいと思います。

以上を実施すると共に、これを公開し、いわゆるガラス張りの会計制度の確立を念願にしております。

会報の活用

従来は各団体及び地方との連絡が不充分で、本部独走の非難がありましたが、今後は会報を活用する事によって連絡を果したいと思います。

各方面よりの意見・批判・非難・注意等何でも歓迎します。夫々御返事申し上げますが、特に一般的な問題はこれを会報に載せたいと思います。又本部の方針、計画等も出来るだけ会報を通じ皆さんにわかるようにします。

以上の趣旨から、新執行部を樹立しましたが、実行に当っては、何分にも従来のベテランから新人に交代した面で不安が多々あります。

最後に当って、全くの素人の私にして、責任上今日の困難な時に敢えて会長に就任した心中を御察しの上、ハンドボール人の奮起を促し、全面的な協力と、各方面各位の御後援を切に御願い申し上げます。

全員一致の協力を

理事長　荒川清美

四月七日全国理事会において協会組織運営について、集団指導制を施くか、理事長制を施くか、検討論議の結果、理事長制を施くことに決定したのである。

しかし、理事長選出方法について論議が交わされた結果、出席者の互選になり、その結果を会長が指名する方法が採択され、その指名を受けたのが、はからずも自分であった。私ごときものが、その資格ありや否や、問うまでもなく、自分が十二分に認じていることで、正に「寝耳に水」とはこのこと、誠に恐れ入った次第である。

過去十数年来、有能にして、且つ経験豊富な前理事長が敏腕を振るわれ今日の隆盛をみた斯界。その後継者と思うだけでも汗顔のいたりである。

しかしスポーツ界を見るに、シーズンを迎え、躍序として前進している現状を知るに、此の期重大なるを感じ、いたづらに空白なる時間の浪費は、さけなければならないことを痛感し、非才なるも会長始め全国諸先輩各位の協力のもとに、その任を受けることを内諾した次第である。

本稿は理事長就任の抱負をとのことであるが、現在までの協会の発展の経過と、今後の諸問題について熟慮する期間が必要なため、完全を期することができないが、現段階における私の所信の一端を述べて、抱負にかえたいと思う。

一、協会執行機関の充実をはかりたい。

理事ならびに常務理事はもちろん各委員においても全国より人材をもとめ、それぞれの部署において責任の分担を確定し、円満にして且つ効果的な業務の執行をしたい。

一、執行業務に関して会長の意志を重じ斯界は勿論各界諸先輩の意見を拝聴すると共に愛好者との

交換を図り斯界にプラスになることはことの大、小を問わず生かす執行をしたい。

一、技術の向上に関しては、国際的視野を広めることは勿論のことであるが一線級の選手の頂点だけが高くなっても、土台となる底辺の拡充がおろそかになっては、味けなく、もろいものである。

ために国内における指導陣容の強化の確立に努め将来ハンドボール独自のコーチ制度を確立し指導者相互の研究の場をもとめることが必要であろう。

そしてこれらの場から、よき指導者に国際的勉法の場を与えて技術の向上に役立てたい。

もちろん、これらすべてのことを短期間に円滑に実行することは幾多の困難を乗り越さねばならないことは、覚悟いたすところである。しかしこれらを乗り切つて始めて国際的に通じる道が開けると思考している。

以上の諸点から見るにつけても、まことに、その道はけわしく苦難が予想され、口舌を絶するものがある。この期にあたり、全国各層各位の御支援と御勉達をいただき、非才をかえりみず斯界発展に努力したいと考える次第である。

今後は人の和をもって、目標に向って前向きの前進をする協会にすべく全国諸兄の御協力を衷心より御願いする次第である。

公認指導員制度の確立を

普及部長　徳　永　陸　繁

前理事長の辞任後、四ヶ月は過ぎた。人間中心でやってきたということだが、このたびのなりゆきの中にも押し出されたところてんも一応形なりのものはできあがった。

三十数年来、ハンドボール競技を愛好して来た一人として、競技の普及指導部を担当する使命を受けた訳であります。少しでも、何かお役に立てばと、快よく引き受けることにした次第です。

所信について、何か申し述べるようにとのことであるが、今さら決して対立抗争的なことを申す訳ではありません。

ハンドボール競技の普及強化については、いろいろな角度よりこれからの実体調整を計りながら、全国の組織的な御協力態勢を受けながら、ほかのスポーツ競技団体に遅れることなく、大いに拍車をかけてやりたいと思っています。

これまでに口ぐせに普及度とか底辺の拡大とかお互いに力説し、三万五千人の人口の伸長、又一般大衆への関心度、競技のだいご味もかなり浸透させるなど、意気ごんで参った訳ですが、その努力は関係各位の立派な姿勢だったといえましょう。

幸に今度かねての念願であった中学校体育指導要領への復活も大体見通しがついたことを聞いて、これまた各位の努力の賜と言えましょう。

したがって、今後、ハンドボール競技がどういうふうに伸びてゆくか、どのように運営し、活動させ、普及効果を挙げたらよいか、又潜在している指導内容の諸問題を一つの事だけの条件にたよることでなく、お互に助け合い、研究していくことでなければなりません。

各都道府県の普及度にも、地理的条件などの共通な問題を見出し普及活動ができるための要素を明らかにしようと思う次第であります。

審判部門に公認審判員制度があるように、普及指導部門に於いても、公認指導員の設置が必要かと考えられます。コーチの強化策などを確立し、一貫した指導内容をもった指導向上を計ろうと言うものです。

ハンドボール　42号目次

【表紙写真】
——第6回男子7人制世界選手権より——

来るミュンヘンオリンピックを目標にして、緊急にその効果の実を挙げたいものでありますが、これまた愛好者のみなさまの御協力をまたねばなりません。まずはみなさまと相寄り、相助ける心が必要だと考えています。

具体的目標としましては、昨年その効果を挙げることができました、チーム数を一割増加させることに主力を注ぎ、努力する所存であります。

また実際の仕事の面では、互いに密接な関連をもっている、技術部、審判部と協力体制を作りあげて、1＋1＋1が3以上の実効をあげられるようにしていくつもりであります。

各連盟に審判部長を（仮称）

審判部長　安藤純光

昨春以来の日本ハンドボール界の混乱は、ハンドボール愛好者の一人として誠に遺憾であり残念であります。いまだに正常なあゆみをしていない状態では、一体日本のハンドボールはどうなるのか、憂慮にたえないところであります。

ハンドボール協会は、ハンドボールを忘れているのではないか、選手は相変らずハンドボールに熱中しているのに。これら選手に対しては申しわけないことではありますが、落ちるところまで落ちたハンドボールを一日でも早く一歩でも前進させようではありませんか。

プレーヤーから遊離した協会であってはいけないし、プレーヤーが円滑にプレーできるように運営されなければならないでしょう。すべてはここから出発しなければならないでしょう。

さて、このような重大なときに、私ははからずも会長の指名による理事に選ばれ、また常務理事・審判部担当という重要な職務を当てられました。「抱負」をといわれても、何からはじめればよいのか途方にくれている状態です。

しかし、幸にして、前審判部長若崎先生のもとで、およばずながら審判部の仕事をして居りましたので、とりあえず、当時からかかえておりましたいくつかの問題について、漸次改正・整備して行きたいと考えて居るところであります。

たとえば、審判講習会の在り方（審判技術の向上）、審査の方法、審判員名簿の整備など、とくに従来は、協会審判部長が協会主催の各大会の審判長をつとめて居りましたが、これもせめて高体連、学連、実業団（？）には、それぞれ審判部長（仮称）をおいていただき、それぞれの部で分担して審判の実務を遂行していただくような制度にしていきたいと考えて居ります。

いずれに致しましても、審判部委員をお願いした方々はもちろんですが、全国のハンドボール関係者の皆様に、これまで以上の御協力御支援をいただきまして、未熟者ではありますが、なんとか任をまっとう致したいと考えて居りますのでよろしくお願い致します。

最終目標は世界選手権優勝

技術部長　中沢重雄

ハンドボール協会の技術部の仕事をするように先般指示をうけたやさき、その任にあたるについて抱負をと言う注文、正直申して自分の分に余る仕事だけにこれからどうあるべきかと考えても、いまだまとまっていないと申し上げるほかない。

しかし今まで技術部に何年か所属して来た私自身幾分でもその感想や識見を述べてみたいと思う。技術部の任務と言えば、前任者松本技術部長時代からの仕事を受けつぎ、それをのばしハンドボール競技技術の向上、選手の全般的なレベルアップそれには優秀な指導者（コーチ）を多勢養成する事、そしてそれを男・女世界選手権へ結びつける事、強いては世界選手権に勝つ事が最終目標と考える。すなわち、選手強化に他ならぬものと言えよう。

この任務をどのようにもって行くかはすでに何年か前から出来、今年も発足する技術部専門委員会全員の熱意とこれを軸としたハンドボール関係者全員の協力に関るものであろう。この専門委員会も、もう一度そのあり方を練りなおして目標に一歩前進したいものである。私も幸い、再度世界選手権をまのあたりに見、経験する機会に恵まれ、どうしても〝世界選手権〟は何んとかしなければと言う沸き上るような気持をおさえる訳に行かない。

日本のハンドボールが〝世界に認められつつある〟強いては日本国内以上に評価を高めつつある現実に注目すべきである。それには早く手をうつ事、出場の直前に代表チーム編成では遅すぎてどうしようもないと申して過言でない、次回をめざし一ときも早く編成にかからねばならぬだろう。そしてあらゆる智力と出来得る手段全てをやり尽して代表を送りだす方向にもって行くべきで、このように考える人は私一人でないと思う、考えるだけでなくぜひ何んとか出来ぬものかと切望する次第である。

しかしこの目標に当達させるには地盤がしっかりせねばならぬ、これが目に見えぬ一番重要なポイントであろう。これが選手全般のレベル向上であり、底辺の拡充、選手層の厚さとなって表われて来ると思う。優秀な指導者を数多く養成する事、そして縦の線がはっきり現れ機能化する時ハンドボールの本当の魅力が出て来るのでなかろうか、技術に関する計画試案を練る技術部専門委員会が日本のハンドボール界を代表する意見ならばそれを実行に移すのが日本ハンドボール協会であろう。計画が一〇〇％実行出来得なくても一歩でも二歩でも年々前むきに進めるならば幸いと考え、私もそれに努力したいと思う。ぜひとも関係皆様の御指導と御協力を切望致します。

西ドイツチーム来日決る

男女各1チーム9月8日から 9月29日まで各地で20試合

ここ数年来、懸案になっていた西ドイツチームの招待は、数度にわたる手紙の往復および、世界選手権大会に遠征したチームがヨーロッパで西ドイツの首脳陣と会談をもったりした末、やっとこのたびの来日が正式に決定した。

日本に来るのは、男女二チームであり、人員その他の詳細はまだ入ってはいないが、西ドイツの強力な第一級の力をもっているチームが西ドイツを代表して来ることは確実である。

西ドイツでは、男子は昨シーズンから国内リーグを行なっており、その底辺も、頂点もともに充実してきている。

世界選手権大会では惜しくも、6位にとどまったが、東欧の諸国の力で押していくチームには見られない、多くの洗練された技術を兼備しているのが西ドイツチームである。

ここのところ世界選手権では、あまり振わないが、かっては、全ヨーロッパをなでぎりにしたこともある国である。

西ドイツの7人制チームの来日は、はじめてであるが、一九五七年には、11人制の世界男選手権チームが来日したことは記憶に新しいところである。

また戦前にもドイツと対戦したことがあり、最近では、ドイツの練習艦隊チームと駒沢体育館で試合したことを記憶の人も多いだろう。

このように、多くの関係をもっている西ドイツとの対戦が実現したことは非常に喜ばしいことである。一九七二年のミュンヘンオリンピックを眼の前に控え、その強化対策に心をくだいている我国のハンドボール界にとって、世界でももっともオーソドックスなチームカラーを持ち、技術・戦術とも洗練されているこのチームと対戦することは、すべての面からみて大きな意義があろう。

世界選手権大会出場者は西ドイツのナショナルチームとすでに男女とも対戦ずみであるからそのチームプレーにも通じていよう。

この対戦した体験を基盤にして今度の二十試合を通じて彼の技術戦術をすべて、こちらに消化して来るべきオリンピック、世界選手権に勝てるチームを作りあげることが最大の目的となろう。

男女各十試合、計二十試合の試合を通じて、多くのものを得、西ドイツチームの来日を新しい踏み台として、この対戦を利用し、オリンピックめざして、一丸となって努力していくことが大切と考えられる。

世界選手権で指適されている我国の欠点、これを——特にディフェンス面——いかにして克服していくかの課題にいくばくかの解答はつかんでほしい。

選手団は本年九月八日に羽田に到着し、九月二九日に羽田をたつ二十二日間の予定で来日することになっている。

別欄のとおり、予算も決り、あとは日本の受け入れ体制が完全にととのうのをまつばかりになっている。

現在まで、試合を行なう意向が伝えられるのは、名古屋、静岡、熊本、岩手、東京などの各地である。

◇　◇　◇

西ドイツ特別会計予算

支出

○航空旅費分担金　三六〇万円

○本部協会負担宿泊食事
35名（含日本側役員・通訳）×11泊×五千円 ＝ 二〇〇万円
（注）対戦チームが一泊三食負担

○国内旅費　35名×二万三千円 ＝ 八〇万円

○レセプション　一〇万円×2回 ＝ 二〇万円

○雑（国際協会納付金・選手小遣土産など）　四〇万円

計　七〇〇万円

収入

○対戦チーム分担金
三五万円×二〇試合 ＝ 七〇〇万円

一、テレビ放送料収入は対戦チームに還元する。

二、男女各一試合、三五万円を本部協会納付金とする。

三、本部協会納付金は（ドイツ協会に対する航空旅費分担金が出発前払込となっているので）八月末までに前納のこととする。

新会長・理事長略歴

◇新会長　鈴木達雄（すずき・たけお）東京都出身、東大出、レナウン工業相談役、56才、女子実業団レナウンの発足と同時にハンドボール界とのつながりが生まれ昭和40年役員改選で副会長に推される。同年11月式場前会長の死去で首席副会長、さらに会長代理を42年2月までつとめていた。

◇新理事長　荒川清美（あらかわ・きよみ）福島県出身、日体大出、日体大教授、日体大監督45才、戦前の日本で名HBとして鳴らし、その後も第1線で活躍。昭和25年度から6期(11年)協会常務理事、36年オリンピック東京大会選手強化対策本部員、39年から41年まで関東学連理事長、42年1月全日本学連理事長となったが今回の選出で辞任の予定。高嶋時代から「政治力の高嶋、技術の荒川」といわれたほどでその技術理論と指導力を高く買われていた。現在の地方指導者の大多数はその教え子。主に学生界を活躍の場として今日に至り母校以外の関東諸校OB間にも人気がある。みゆき夫人は日本体操協会指導部副部長。

会長に鈴木達雄氏

理事長に荒川清美氏

―新役員決る―

定期評議員会議事録抄

日時　昭和四二年二月二六日
場所　日本体育協会四〇一号室
出席者　染谷（茨城）、渡辺（東京）、保坂（神奈川）、近藤（新潟）、鈴木（長野）、小川（三重）、野原（大阪）、村山（岡山）、岡崎（佐賀）以上九名、委任　二九名
議長　鈴木達雄会長代理

協議事項

一、会長の件

会長選考委員会の選考経過の説明があり、この委員会の結論は会長代理の鈴木達雄氏を会長に推薦することになったとの報告があった。出席者全員の賛成を得たので、鈴木達雄氏が会長になることが決定した。

この後、新会長鈴木達雄氏からしっかりやっていきたい、みなさんの協力一致を得たいとの話があった。

二、昭和四二年度一般会計および機関誌会計収支予算案について

事業費は一括して、新執行部の手で、改めて立案したいとの説明が執行部によってなされた。質疑応答のあった後、新執行部の手で練り直すこととし、文書で予算案を評議員に出すことになった。

それに関連して次のような意見がでた。

評議員会、理事会、理事長会議の交通費を協会から支出するようにしてはどうか。

地方のことをよく考えた予算案にしてほしい。

収入をふやすことを考えては、加盟金にランクをつけることも考えられよう。

各種団体のことを考え、補助についても十分に考えてほしい。

事務局長を置いてはどうか。

機関誌の予算も検討されたい。

機関誌の内容も地方を十分に考慮に入れたものにしてほしい。

三、昭和四二年度行事日程案について

別表のとおりの行事日程の説明があり、教職員大会は新執行部で考えることになり、国内関係の行事が決定した。

中国遠征については、日中文化交流協会と話し合いを行ない、その結果を報告することになった。

西独招待については、西独のチームのきたいとの意向がかなり強いのは確かであるが、西独国内でのもめごとの影響のためか返信が遅れているが、来ることは確実なようであるとの報告があった。

協会三〇周年記念については、新執行部決定の後、検討していくことになった。

報告事項

高嶋理事長の辞任について、鈴木会長から報告があり、評議員会はこの問題を了解した。

ついで総務部から報告事項があり、審判部は大会審判割当、A級審判員講習会、審判審査委員会、講習会について報告した。

普及部からは、徳島県の加盟により四六都道府県および沖縄県にハンドボール協会が発足したこと、体育指導者講習会に講師を派遣したこと、指導要領に復活させるよう運動していること、および普及に関するアンケートについて報告があった。

技術部からも報告があり、高校の部優秀選手などについての報告が主であった。

協議事項

副会長増員について以下のように決定した。

会長および評議員から希望があり、会長をたすけるため、六人の副会長が予定されている。

副会長　保坂周助氏
（体協等の関係）
学連から一名
（技術面）
高体連から一名
（普及面）
大阪地区
愛知地区　各一名
東京地区

このブロックからの副会長は原則として地区協会長とすることになった。

監事、理事については、会長一任となった。

昭和42年度行事日程

第10回全日本学生選手権大会	7月12日～7月16日	東京
第18回全日本高校選手権大会	8月2日～ 8日	和歌山
第10回全日本教職員選手権大会	未定	
第19回全日本総合選手権大会	8月22日～ 26日	福井県高浜
第16回学生東西対抗戦	9月17日	名古屋
第22回国民体育大会	10月22日～ 27日	浦和
第20回学生王座決定戦	11月23日	東京
第14回全日本選抜選手権大会	12月13日～ 17日	東京
第8回全日本実業団選手権大会	女子 43年2月7日～ 11日 男子 2月10日～ 14日	熊本 大阪

副会長は現在次の六氏が決定している。

保坂周助氏（体協関係）
児玉九十氏（高体連関係）
西 敏郎氏（学連関係）
渡辺和美氏（東京地区）
小杉仁造氏（愛知地区）
馬場太郎氏（大阪地区）

理事二六名決定

新規約による理事二十六名は次のとおり。

地区連盟選出理事　十名
北海道地区　未定
東北地区　佐藤　敦氏
関東地区　入江　暢一氏
東海地区　栗脇　嶷氏
北陸地区　天野耕兵衛氏
近畿地区　森田　正英氏
中国地区　藤田　信義氏
四国地区　越智　武氏
九州地区　藤田　八郎氏
沖縄地区　平仲　孝栄氏

全国連盟選出理事　六名
高校体育連盟　山田　計氏
　　　　　　　清水　正氏
学生連盟　荒川　清美氏
　　　　　一名未定
実業団連盟　古賀　洋二氏
　　　　　　数原健一郎氏

会長推薦理事　十名
岡村　昭二氏
安藤　純光氏
中沢　重夫氏
浜田猪三郎氏
徳永　陸繁氏
的場　益雄氏
若崎　重富氏
境井　秀三氏
藤本　強氏
増田　一郎氏

監事　二名
青木　近衛氏
山田　稔氏

理事長に荒川清美氏

第一回理事会

新任の理事による第一回の理事会は四月七日（金）に日本体育協会で開かれた。

鈴木会長、保坂副会長、馬場副会長、渡辺副会長ほか各理事が出席した。

理事会は、慎重審議し、理事長を置くことにし、理事長に荒川清美氏を推薦した。

理事長より特に要望があり、今回は二人の理事長を補佐し、職務を総括的にまとめる常務理事を置くことになった。

この二人の常務理事には、的場益雄氏、若崎重富氏が就くことになった。

各理事の事務分担は次のように内定している。今回は理事の数が少数であるので、各部には、多くの有能な専門委員を置き、一致協力して、ハンドボール界発展のため仕事をすすめていくことが確認された。

総務部（岡村）　庶務・登録・用具
財務部（浜田）（数原）　財政・経理
技術部（中沢）　技術研究・選手強化・スポーツ少年団
普及部（徳永）　普及指導・規則研究
審判部（安藤）　審判員審査
会報部（藤本）　編集・出版
渉外報道部（境井）（増田）　国内・国外

常務理事会は理事長、各部担当理事および関東、東海、関西の各地区からの理事一名ずつによって構成することになった。

関東地区は入江理事、東海地区は栗脇理事、関西地区は山田理事が常務理事会を構成する理事に予定されている。

各専門委員会の構成は近日中に決定することになっている。

次いで体協派遣役員について、人選がなされた。これは二月二十六日の評議員会で了承されている。

国体　荒川　清美氏
競技力向上　徳永　陸繁氏
J・O・C　的場　益雄氏
評議員　鈴木　達雄氏

1967年を展望する（1）

＝学生界・女子実業団の巻＝

杉山　茂
（NHK運動部）

新シーズンの幕があいた。昨年はどの分野も新鋭の抬頭がめざましかった。これらの新しい力がさらに成長を示すか。伝統を誇る名門・古豪の巻きかえしがなるか——。

ミュンヘン五輪決定後最初のシーズンである今季は西独男女の来日も決まり、一そう興味深い展開を見せそうである。2回に分けて今年の情勢を探ってみよう。

学生界

この雑誌が読者の手もとにとどく頃各地の学生リーグは熱戦たけなわであろう。今年1月スウェーデンで開かれた第6回世界男子7人制選手権に学生を主力とした全日本が若々しい力を存分に発揮、多くの賞讃を集めたことや、ミュンヘン五輪決定の報が学生界を大きく刺戟しているようだ。

熱っぽいムードが、どの学連からも伝わってくるのは、そうした背景の反映だ。

しかも今年は、日本最初の学連組織が生まれて30年目、東西学連の接点として発足した全日本学生王座決定戦が20回目、全国の学連組織の結束ともいえる全日本学生選手権が10回目といずれも記念すべきシーズンにあたる。対抗勢力と目される実業団、教員クラブ界のうち、さしあたって強豪とみられるのは大崎電気（埼玉）、大阪イーグルス（大阪）だけで、今年の全日本各大会は学生勢の発らつとした攻防によって争覇される公算が大きい。欧州帰りの技術がどう消化されて現われるかも焦点の一つ。

抜群、立大の攻撃力

その学生界で実力的に頂点へ立つと予想されるのは立大・芝浦工大の二強、それを追って同大、関大の関西勢と早大、中大、日体大教大など関東の名門諸校であろう。関係者が口を揃えて「強い」と推すのは立大だ。

世界選手権の予選ラウンドでヨーロッパの著名選手をおさえてリーディング・ゲッターとなった木野をもつことと、昨年のレギュラーからGK尾形が抜けるだけという堅陣にその裏づけがある。

木野—北村の世界選手権コンビを軸に東、野田、北井、小野口、倉前らによる攻撃力は抜群であり、他校ならすぐにでも起用したい一八七センチの新人・有永（西宮専高）も、ゆっくり育てて使おうというあたり余裕さえのぞかせている。有永の力しだいでは迫力が一段と加わることも可能。

昨年は接戦になると巧者江名（OB）の力を借りていたが、木野、北村が本場の味を体験して、その必要もなくなりそうである。

追う芝浦工大、同大ら

立大独走を阻む力があり、しかも全日本タイトルも、ということになると東の芝浦工大、西の同大関大あたりが有望。芝浦工大は、昨年立大に1勝2敗（このほか全立大に2敗）。

近藤・関根の卒業は痛いが近森、山田、竹内、小林、GK山村らが健在で高鍬（桜台高＝2年）をはじめとする有力新人も成長をとげているので立大に大きな差をつけられているとは思えない。たくましさがもう一押し欠けるのを、どう補うかが王座奪還のカギではないか。

同大は、ゲームメーカー林とGK林谷を送り出したが、飯田（世界選手権代表）をはじめ長身選手をそろえ、得点力は、今年も西側ではトップのようだ。

4月の西日本学生決勝では関大にディフェンスの甘さをつかれ1敗したが、むしろこの敗戦は、常勝に甘んじていたことに対する警告にもなり、守本、佐藤、稲葉、舟木、蔦品、松浦らの攻撃陣が調整されれば、やはり全日本最上位の力を示すことになろう。

同大の天下を久しぶりに崩した関大は、昨冬の全日本選抜をほとんど新メンバーで乗り切り自信をつけたのが大きい。同大の豪快さに対し多賀谷、加古、宮永、GK平松らテクニシャンが中心。王座出場の宿願も夢ではなく、全日本のダークホースとしても興味深い存在である。

復活なるか早大・関学

第二グループと目されるなかでは早大の呼び声が高い。

有力選手をかかえながら不本意な成績に終わることの多い最近の同校だが、これは〃心〃の問題。昨秋5年（10シーズン）ぶりに3位へ返り咲いた自信を欲に変えて欲しい。

春の成績いかんでは小島、籏野らを中心に久々に全日本での活躍が期待できそうである。

日体大は昨秋、史上初の6位（関東学生）というみじめな成績に泣いたうえ、多くの卒業生を出したが、大宮、神谷を軸に試合運びの巧さは定評がある。大西（世界選手権代表）と平岡をもつ東京教大も返り咲きを狙う組だ。伝統ある両校だけに奮起が実れば上位陣の一角に波が立とう。

中大を推す関係者が多いのはメンバーの変動が少なかったこととGK竹下の存在にあるようだ。

竹下は世界選手権に参加して驚異的な成長をとげたといわれ尾形（立大）、林谷（同大）、牧（中京大）ら代表的GKが揃って学窓をはなれたあとだけに一そうそのプレーが注目される。

西の名門関学はエース飯端（世界選手権代表）の卒業がなんとしても痛い。彼の突進力、シュート力はヨーロッパでも目立ったようで、この穴を西野、永井、喜田らでどう埋めるかにかかる。関学に

とってはすでに9シーズン手元から離れた関西学生の首位をとりもどすことが先決で、それを果せば全日本最上位への復活に自信も湧こう。関西三強によって今年こそ関東との差をつめてもらいたい。

このほか関東では法大、慶大、明大、関西側では甲南大、大阪経大、桃山学院大らがどのように持ち味を発揮して上位を狙うか。新進校では日大、国士館大、明星大ら関東勢の評判がよいようである。なお関西学生は今春10年ぶりに3部を復活した。

成長示す地方学生界

最近の地方学生界の成長と充実度はむしろ東西をしのぐものがある。運営力の向上につれてレベルアップも著しい。東海14連覇の中京大、昨年西部学生3タイトル(西部大学、九州学生、九州IC)独占の西南学院大、東北・北海道5連覇の新記録をめざす東北学院などの実力は全日本学生のダークホースに列してよいものがある。

このほか今シーズンは富山大、金沢美大(以上北信越)、愛知教大(東海)、広島大、山口大(以上中四国)、熊本商大、九大(以上九州)らの進出が期待されている。

地方学連の拡充のためには東西諸校の積極的な交流がのぞまれるが、今秋の東日本学生王座を発足4年目の北信越学連が招致したような地方側の意欲的な態度もさらに強められてよいだろう。

女子は今年も日体大

女子は昨年日体大が、実業団と互角の線にまでレベルを引きあげ注目されたが、今シーズンはさらに発展しそうだ。実力的には日体大が相変らず強く、関東学生での連勝と全日本学生3連覇はよほどのことがないかぎり動くまい。

むしろこれを追う東京女体大、日女体大(以上関東)、中京大、中京女大(以上東海)の成長に期待がかけられ、国士館大(関東)、松阪女短大(東海)が先進校をどこまで追いつめるかもみもの。

田村紡、無敵ぶり発揮か
"若さ"のぞかす大崎電気

女子実業団

これまでB級と目されていたチームの充実でますます"多党化"。大会ごと、一試合ごとにファンを熱狂させそうである。

昨年二冠ずつ分けあった大崎電気(埼玉)と田村紡(三重)が今年も最強力であることはまちがいない。

大崎は宇井、笠原、黒川、堀、GK古谷が退陣、鈴木、早川、加藤、木幡、小林、GK川崎らが柱となる。新人は久保田法(静岡城北)、神藤(深谷女)、羽生(麻生)で宇井らの穴をどこまで埋められるか。

鈴木・早川らベテランのリードを若手が本格的シーズンまでにどう活かし調整するかが今年の成績を左右しよう。7MT選手として話題を集めた堀が1年で退社したのも響くのではないか。

田村紡は内藤が退社しただけでGK渡辺美、小林、渡辺好、種村水谷、清水が健在。内藤の穴は去年入社の長谷川、甲村、吉開らが伸びているので心配ない。スピードにあふれた攻守は一頭地を抜いている。3月熊本に遠征、大洋に3連勝している。

しかし去年もシーズン前最強といわれながら必しも"圧勝"ばかりでなかったことは、このメンバーをしてなおどこかに"不安"があることを示す。

調子の波に乗った時はよいが、苦況に立った時それを乗り切る度胸に乏しいのだと思う。その"若さ・もろさ"も2月の全日本実業団、東海室内では感じられなくなった。

昨秋の三重県選手権で高校チームを相手に64—1という考えもつかぬ試合を彼女らはしている。

いくら相手が弱くてもそう簡単にできる記録ではない。この無敵ぶりを今年こそシーズンを通してみせて欲しいものである。

スケール大きい大洋

昨年無冠の大洋デパート(熊本)。今年はそのスケールの大きなチームカラーを一気に爆発させそうである。

GK山口、中村、稲田が退いたものの18人という厚い選手層をもつだけに破たんを招くことはあるまい。新保、高山、今村、枝尾、垂水らの攻撃力はスピードも充分。特に昨年後半からその好素質を発揮しはじめた垂水のプレーは新しい"女子界のエース"として注目してよいものがある。

新人は渡辺(菊池農)、元島(天草)、下枝(加治木)、米(熊本市立)、坂本(福良)と九州の有望な若手を選抜したかたち。渡辺はすぐにも第一線に登用されよう。

愛知紡(愛知)も立ちなおって来ている。去年のメンバーから元気ものの高橋が抜けただけ。小林、関口のベテランにつづく、五十嵐、前田が進境を見せ攻撃陣に厚味が出来た。

新人はGK中下、藤池(ともに山陽女)と岩崎(新居浜商)。手うすのGKも尾崎、中下と2枚揃った。

県内にブラザー工業が生まれたのもよい刺激になろう。

三菱鉛筆、大きく躍進

男女を通じ今年の球界で一番の成長株と見られるのは三菱鉛筆(山形)だ。

昨秋東京選手権決勝で大崎を破った時はフロックといわれたが2月の関東実業団で再び大崎を破りもはやその実力を疑う者はいなくなった。

堅実なディフェンスと三井田、江川、蓮見、藤盛らの攻撃力に一段と安定度が加ったことが躍進の因だ。

東京重機(神奈川)は選手不足もあって発足時の精彩がない。三菱にはっきり水をあけられてしまった。奮起が待たれよう。レナウン(東京)、揖斐川電工(岐阜)がカムバックすると伝えられるのは嬉しい。実績のある両者だけにシーズン後半には活躍が望める。

新生チームとしてはブラザー工業(愛知)、宗形製作所(大阪)などが話題。身近かに田村紡・愛知紡をもつブラザー工業がまずとび出して来そうだ。

上位の激しいせりあいにこれらの復活・新進組が食いこむようだと波乱があいつぐことになる。

来年はモスクワで世界選手権が開かれる。国内での強者同士の対決が、世界の舞台でどのような花に実るか、その興味はつきない。

次回は一般、高校界の展望

欧州遠征から得たもの

各コーチのメモに拾う

第6回世界男子7人制選手権に出場した日本チーム馬場団長以下役員4、選手15人は2月4日無事帰国した。
戦績は別表の通りだが、今回の遠征で得た教訓を役員のメモから拾い出し特集してみた。

○…日本は準決勝リーグ3試合で得点73、失点84だった。

得点は西ドイツの89につぐ参加16ヶ国中2位の成績であり、大会関係者がこぞって日本のシャープな攻撃力を賞したのを裏づけている。

しかし、失点の方も多くカナダ92につぐ2番目の数字である。ルーマニアがわずか30にとどめているほかチェコ34、デンマーク38と上位国は準決勝リーグ(3試合)を30点台の失点で食いとめており、わが国との差はあまりにも大きい。日本が宿願を果すためにはディフェンスの力をいかにして強くするかが課題といえそうだ。

各国のディフェンスに対する研究は進歩しており『日本のディフェンス作戦は立ち遅れ』(稲石コーチ)という。

この大会で各国の見せた〝守り〟はかなり多彩なものがあり、特に相手のチームのポイントゲッターを徹底的につぶす方法が共通の傾向だと各コーチは口をそろえている。

日本でも昨年、芝浦工大×立大戦で芝工大が立大のエース木野をぴったりとマークした作戦をとり、際立った攻撃力を持つ相手選手に対する防禦として一つの新しい方向を示したとされたが、このゲッターをマークする戦法がヨーロッパ諸国の間でも多用されているわけだろう。

また、速攻に対する帰陣の速さも想像以上で『GKからのパスアウトで一気に速攻、得点に結びつけることが難しかった』(馬場団長)。

〝戻り〟の速さについては訪欧のたびに云われていることだが、行くたびにそのスピードがますます早められているといったところらしい。

○…各国がしきりに使っている作戦として『攻・守分業がある』(勝コーチ)。

つまり攻撃時と守備時を分けて選手を交替させるのだ。『その交替が実に素早い』(稲石)から効果があがるわけで、大会後にベスト・セブンとして表彰されたFPのうちマーレス(チェコ)、ソロンムコ(ソビエト)らは、〝守備屋〟だそうだ。

『ディフェンスのうまい選手は身長が一メートル七〇から七五ぐらいで比較的小さく日本選手とかわりない。

日本チームのディフェンスに発展の希望があるともいえよう』(村田)という意見は興味深い。

めまぐるしく選手を替えてチームプレーが保てるかどうか疑問が残るが、『外国選手は大過なく守り切る。

日本選手は攻防両面で、もっと臨機応変の処置がとれなくてはいけない』(馬場)というのはやはり基礎の差、訓れんの差であろうか。

防御のフォーメーション(シフト)は1・5または一線(0・6)そこから多彩に変化する。相手の攻撃フォーメーションに応じての変化である。前述した徹底したマン・ツウ・マンもこのベースから生まれている。

日本選手の最近のディフェンス力に対して村田監督が『個々のフットワークと心技両面の構えに欠けるものがある』としているのは傾聴すべき見解である。

11人制で試合していた当時はマークをはずされると非常に目立ったものだが、7人制ではカバーが比較的しやすいためこうした技術や意識がたしかにうすれて来ている。

ボールを持っている選手に対してはとにかく、その他の選手を『遊ばせすぎる欠点』(村田)がしばしばおきる。具体的にいえば『相手(攻撃者)との間、それに対する詰めの悪さ』(中沢コーチ)だ。

ましてキャリア豊富なヨーロッパ選手が相手では、こうしたもろさを見せれば、一たまりもなく突破され、得点へつなげられてしまう。

○…ゴールキーパーの技術については、今大会ではベストゴール

キーパーに選ばれたホルスト（デンマーク）を除いては差はなかったようだが、ホルストのうまさは『芸術品だ』（村田監督）という声があるほど。

日本のゴールキーパは尾形（立大＝今春卒業）竹下（中大）の二人が出場したが、竹下が遠征中に長足の進歩をとげ、コーチ陣はキャリアをかって尾形を先発させていたようだが、大会関係者やライターたちは竹下を何故初めから使わないのかとしきりに質問したという。

こまかい技が成功

○…攻撃面はどうか。

日本チームの試合ぶりをみた人たちは口を揃えてその動きの速さ・こまかさを賞していたとのことだ。

『小さいリターンパスプレーが成功した』（村田）とコーチ陣もそれを自認している。

しかし反省すべき点も多々ある。個々の問題としては『日本も体力・持久力は外国に見おとりしなくなったが瞬発力はまだまだだ。〃ゲームにおけるスタミナ〃の養成を今後は考えていかなければいけない』（村田）。『日本選手もボールを片手で操作することを平常心がけて欲しい。身長が一七五以上ある選手ならこれは可能』（稲石）。

またチーム全般としては『多彩な攻撃と評判になったもののペースの配分には反省の余地がある』（勝）。『木野・飯端の活躍が注目されたが、裏から云えば日本はこの二人に片よったオフェンスしかない。

どの選手がどのようなポジションをとっていても同じように動けるようにならなければ世界のトップクラスに仲間入りは出来ない』（馬場）とするのは、〃世界の壁〃のまだまだ厚いことを知らしている。

理想としては『今回成功したこまかく速い動きに豪放な〃飛び道具〃を備える』（中沢）ことなのだろうが、現実論としてはやはり『プレー展開のよみを全員がマスターして日本的な攻法の特色を最大限に活かす』（馬場）以外になさそうだ。

○…諸外国の攻撃法はポスト・プレーとブロック・プレーの混合で、各チームのポイントゲッターの突進力は水際立っているらしい。

得点王となったリョーブキング（西ドイツ）は、対ソ連戦で三人のマークを振り切ってシュートを決めるという並外れた力強さをもっているという。彼は左右両刀使いで去年の11人制世界選手権でも個人得点第2位となっている世界最高のゲッターだ。

『そのリョーブキングも、ディフェンスの力が弱いということで、ベスト・セブンに選こうされないのですから、〃世界〃の広さが判ります』（村田）。

フォーメーション・プレーでは『ポストに入っている選手がダッシュして動くこと』（稲石）が目立つ。

特にルーマニアチームのポスト（ダブル）の動きは激しく、本大会前に訪問しトライアルゲームで対戦した日本チームは、このチームの強さに度ぎもをぬかれたらしい。

がいして『東欧タイプは粘り強く、動きにスピードがあり、北欧タイプはポストプレーにたよりすぎ粘りがない』とは村田監督の印象だ。

上位各国と大会の印象

○…今大会の前評判はルーマニアの連勝にチェコ、スウェーデン、ソビエトがどうからむかとされていたが、結果はデンマークの予想もしない進出にチェコとの決勝になった。

チェコチームは攻守にバランスがとれており日本のコーチ陣もその優勝は順当とみている。

ルーマニアは新・旧交替の時期で3位となったが、若手にグルイ

優勝カップとチェコチーム

チェコのフェイントパス

アを始めとして素質のある選手が多く、次回は王座奪還を果しそうだという。

注目のソビエトは徹底したマンツウ・マンなど個性の強いプレーをみせ、名実ともに世界の最上位にのして来た。

このほかでは東・西ドイツがやはり洗練された攻守を示し、西ドイツのオーソドックスなプレーは今秋の来日が楽しみである。前評判が高く、予選リーグではソ連より上位にあった東ドイツは決勝トーナメントに進めなかったがベスト・ファイブに並ぶ力をもっているようだ。

○…大会の運営はスウェーデン協会の努力もあり、国際試合にもなれているので極めてスムースで、日本に対する地元の関心も高かった。観衆は平均三〜五千でこれは各体育館の収容限度。決勝（チエコーデンマーク）は一万八千の大観衆がスタンドをうめつくしたという。

試合前のセレモニイは一切なく各コーチは日本の大会での開・閉会式もここらで再考する余地があるといっている。

コートは、この大会に限らず、ヨーロッパ各国は40メートル×20メートルが常識で、それ以上フロアにスペースがあっても大きくはならないという。

また、世界選手権では、前・後半サイドの交換と同時にベンチも変わり、つねにデイフエンスサイドにおかれた。

判定基準の問題

○…審判（判定基準）については、村田監督は『日本の現行判定基準はまちがっていない。ただし体格その他で判定解釈の異る部分もあった』といっており、一応日本のレフエリングは正しいとしてよいようだ。

国内の判定といちぢるしく違う点といえば

▽サイドアウト、ゴールアウトはホイッスルを吹かない

▽ゴール前フリースローの位置が厳格

▽フリースローを敏速に行わない場合吹笛でさいそく

▽シュートチャンス以外の場合のデイフエンス側の粗暴なプレーに対しては7MTをとらずほとんど退場

などで、またストーリングについては各国間で種々意見がわかれている。

本大会ではこの点に関しては極めて厳格で攻撃意志なしとみれば、たとえ1分でもストーリングとみなされたそうである。

また、ヨーロッパの審判員は『少年同士のゲームをはじめどのような試合でもレフエリーが正規の服装をしていた』（中沢）のは是非見ならいたいものだ。

遠征成績（10勝7敗）

得点	対戦相手
○36—23	ルーマニア学生選抜
● 9—34	ルーマニアナショナル
●22—32	ダイナモ・ブカレスト
	（以上ルーマニア親善試合）
●29—34	フインランドナショナル
	（親善試合）
●25—30	ハンガリー
●27—38	西ドイツ
○21—17	ノルウエー
	（以上世界選手権B組）
○34—24	ボロモーラ
●23—24	ストックホルム選抜
○32—25	リデインゲ
○27—23	ベ リ ラ
	（以上スウェーデン親善試合）
●21—27	スペインナショナル
	（親善試合）
○27—17	ス テ ラ
○25—18	ストラスブール（東仏選抜）
○34—18	ビルモンブル
○30—14	フランダース選抜
○26—18	ノルマンデイ選抜
	（以上フランス親善試合）

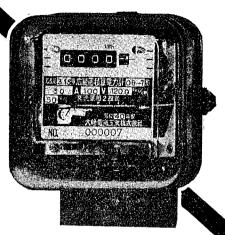
熱気のある欧州各国

○…最後に各役員に〃まとめ〃的な意見を聞かしてもらおう。

これはもはや今回の遠征の反省ではなく、ミュンヘンへの第一歩であるといってよい。

馬場団長『ミュンヘン五輪へ参加が決まり、ヨーロッパ各国関係者の熱意はおどろくほどだ。

この大会でも、下位国からも学ぶものがあれば……といったギラギラしたような態度がうかがわれ、このムードに日本も乗りおくれてはならない。国内での強化対策に一貫性をもたせ、早急にブロック別に有能選手のスカウトと強化をはかるべきだ』

村田監督『参加することに意義といっていたのは昨日の話。現代はスポーツは勝ってこそ意義があるといえよう。そして勝つためには選手の〃心がまえ〃がすべてだ。シュート一本の練習にも〃心〃がなければいけない。

今回の遠征で、若い全日本諸君が、ヨーロッパナショナルチームの選手のそうした面を痛切に感じとって帰って来たのは収獲だと思う。』

勝コーチ『善戦の域から勝利の域に脱皮する時期に来ている。そのためには、出発前の合宿、大会前の訪問国など、すべてその線にそってプランがねられるべきだ。

技術的には、チームとしての基本技——速攻・遅攻を全員が身につけるようにしたい。』

稲石コーチ『外人に対する精神的なヒケ目をまず排せきすべきである。また、単純なことかもしれぬが〃ボールを片手で握りプレーする〃ことが世界への道を開くことになると思う』

中沢コーチ『宿願のベストエイト進出に一つの足がかりをつかむことが出来た——といえるのが今回の遠征の私の結論だ。

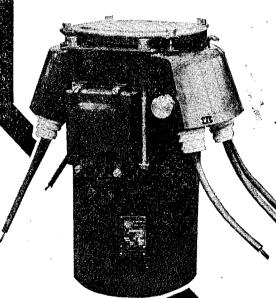
選手団の編成の反省としては、役員は経験者2人をふくむ4人、選手はレギュラー15人のほか、若い次の世代5人を是非加えていくべきであろう』

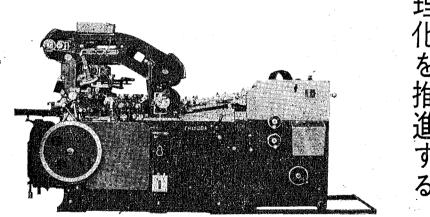
チヨダは印刷機材の合理化を推進する総合メーカーです。

営業三課／栗田満夫

パーフェクトは夢の印刷機（全自動）です。超薄紙から厚紙まで、忙しい人手の足りない工場に大好評。

営業一課／庄司政雄

パーフェクトはたくさんの賞賛の言葉をいただきました。よい製品をつくる励みになります。

営業三課／打林行夫

本社新社屋

新製品 **パーフェクト** 全自動B四截凸版印刷機

千代田印刷機製造株式会社
千代田印刷材料製造株式会社

本社	東京都千代田区神田猿楽町1－4	TEL 東京(292) 2011（代）～8
横浜支社	横浜市西区高島通り1－7	TEL神奈川(045) 44—6572・7358・7028
福岡支社	福岡市御供所町3番16号（聖福寺前）	TEL 福岡（28）3960・0153
立川工場	東京都昭島市東町1丁目1番地5号	TEL 立川(0425)2—2470・4383
九州工場	佐賀県小城郡牛津町（牛津駅前）	TEL 牛津 72

横浜支社

木全（明星）渡辺（菊池）ら38人

41年度高校優秀選手決まる

日本協会と全国高体連ハンドボール部では〝全日本ジュニア〟ともいうべき、「41年度高校優秀選手」男女それぞれ19人をこのほど発表した。今年は何れも3年生で、2年連続表彰された選手はいない。

〔注〕41年度一般優秀選手（男女）の発表は行われていない。

昭和41年度優秀選手（高校の部）

男子の部			女子の部		
位置	氏名	学校名	位置	氏名	学校名
GK	杉山久夫	桜台高	GK	武田繁子	秋田和洋女高
〃	清水邦夫	熊本市立商	〃	中下伊津子	山陽女子高
FP	亀谷正	大分商高	FP	加藤小夜子	夙川学院
〃	木全薫	明星高	〃	石井民代	明善高
〃	田中洋光	〃	〃	滝口治代	山陽女子高
〃	高橋育久	〃	〃	藤池雅枝	〃
〃	斉藤光男	富岡高	〃	渡辺須和子	菊地農高
〃	白石貴義	新居浜工	〃	松野せつ	〃
〃	嶋田昭	修道高	〃	赤塚佐知子	栃木女子高
〃	近藤聖二	盛岡一高	〃	古橋和子	〃
〃	市田隆文	洛星高	〃	塩崎かおる	新居浜西高
〃	浜田昇	函館工高	〃	沢田順子	室蘭商高
〃	藤森薫	上田高	〃	中島倫子	花巻南高
〃	菅徳平	湯沢高	〃	市橋和子	〃
〃	榊良徳	熊本市立商	〃	山出雅代	大分東高
〃	千葉和雄	名城大付属	〃	斉藤滝子	静岡城北高
〃	高橋満	〃	〃	久保田法子	〃
〃	飯沼守男	桜台高	〃	川尻照子	秋田和洋女高
〃	阪野錠一	〃	〃	根アキ子	〃

○　男女ともにGK2名FP17名計19名ずつとし，総計38名

学生連盟の動き

西敏郎氏カムバック
関東学連会長に就任

関東学生連盟では棚橋義輝氏（中央大学教授）の辞任にともない後任会長の人選を進めていたが、このほど西敏郎氏（慶応大学OB、同OB会長）に決定し、発表した。

西氏は昭和28年度の日本協会理事長で、第二次大戦後、球界の復興に力をつくし、日本協会理事長としても短期間ではあったが、新鮮な手腕を見せた人。

ハンドボール界の要職には11年ぶりのカムバックである。

なお同連盟は42年度新人事を次のように決めた。

▽理事長　安藤純光（法大OB）▽副理事長　浜田猪三郎（立大OB）▽委員長　多胡恒治（日体大）

関西・梅野・東海は寛君

▼関西学生連盟は42年度学生委員新人事を次のように発表。

▽委員長　梅野（とがの）行男（同志社大）▽副委員長　置田三男（甲南大）、太田嘉久（大阪府大）、山本勉（立命館大）

▼東海学生連盟は42年度学生委員長に寛和美（名大）、副委員長に安斉博（中京大）君をそれぞれ決めた。

夏まで空席か
全日本学連の会長・理事長

全日本学生連盟会長棚橋義輝氏（中央大学ハンドボール部長）はこのほど辞意を表明され、また同連盟理事長荒川清美氏（日本体育大学OB）は、日本協会理事長に選出されたため全日本学生ハンドボール連盟理事長のポストを近く返上する。

両氏の後任については7月中旬、東京で開かれる予定になっている理事会で協議されるものとみられ、それまでは空席のまま関東学連が事務の代行をすることになりそうだ。

なお、委員長は慣例通り関東学連委員長（多胡恒治君＝日体大）がつとめる。

◆　◆　◆　◆

これはその試合の写真である　芸術品とさえ呼ばれたキーパーホルスト　チエコの面々もその顔をそろえている

決勝より

第６回男子7人制ハンドボール世界選手権試合の決勝はチエコとデンマークで争われ、チエコが14—11で勝つた

世界選手

——西ドイツの技術研究(8)——

ゴール前フリースロー

訳　藤　本　　強
（日本協会理事）

これまで種々の攻撃、防御のフォーメーションを紹介して来た。

攻撃、防御のフォーメーションは非常に重要であるが、今回は現在のハンドボールにおいて、比較的、軽く片づけられているゴール前フリースローについてふれてみよう。

11人制が行なわれていた当時では、ゴール前のフリースローは非常に大きく得点を左右するものとして、攻撃においても、防御においてもかなり研究をつまれていたが、それに較べると現在の7人制においては、さほど研究がつまれていないように思える。

7人制ハンドボールにおけるゴール前フリースローは、非常にすぐれたシューターのいるチームでは、一発勝負としてかなり重要視されているようであるが、そういったタイプの選手のいないところでは、さほど重要に考えられていないようである。

ゴール前フリースローの有利な点は、ボールをもっているプレーヤーから3メートル以内には、防御側のプレーヤーは入ることができないという点にある。

特に最近のルール改正によってレフェリーの吹笛なしに、好きな時にボールを離すことのできる場合においては、この利点は倍加されよう。

ここに紹介するのは、ほんの一例であるので、各チームの監督、コーチ、選手はこれを変化させ、数多くのフェイント・プレーを加味し、ゴール前フリースローがとれたなら、確実に加点できるよう練習していくことが必要となろう。

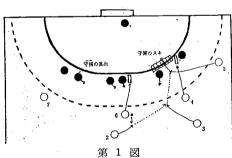
◇　◇　◇

攻撃側の選手にとって、ゴールから9メートルの位置で行なうフリースローは試合の際に特に重要な意味をもっている。

ゴール前フリースローは絶好の加点のチャンスであるので、特に念入りに練習することの必要なものである。

レフェリーの呼笛なしで行える現今のフリースローは攻撃側にとって非常に有利なことはいうまでもない。

守備側の選手達がしっかりとした壁を作ってしまう前に、フリースローを行ない、乱れたままの守備陣をつくことができるという利点を常に利用することを忘れてはならない。

このことを利用すれば、直接シュートもしくは一度のパスでシュートできないまでも、一、二度のパスですぐに攻撃側の人数が守備側の数を上廻り、ノーマークが生じることになる（第1図参照のこと）。

第1図

第2図

しかし、練習の際には、このようなフリースローを行なう際に、はじめから生じている守備側の乱れをつくのでなく、守備側がフリースローに対して、ガッチリと壁を作り、どこからでも打ってこいという万全の構えを必ず崩すといったフォーメーションを作りあげておかなければならない。

攻撃側の選手には、このフォーメーションがどういう手段で相手にスキを作るのか、自分の役割は何なのか、結果はどうなるのかなどをあらかじめ、十分に頭に入れさせておくことがどうしても必要となる。

フリースローを行なう際の戦術としては

（a）直接にシュートすることと、ダッシュしてくる選手もしくはゴールに向ってとびこむ選手へのパスを巧みにタイミング良く混ぜ合わせること。

（b）相手をブロックすることすなわち、シュートする予定のプレーヤーがシュートする位置でノーマークになれるように相手をブロックすること。

(c) ボールのパスは、防御側より攻撃側の人数が優勢になると予測される位置にすること。

この時パスは鋭くなくてはならない。

攻撃側のプレーヤーの一般的な通則

1、攻撃側の選手は真すぐに守備の壁に向って入り、すばやく守備側の選手の全っくいない位置へと動く。

2、ボールがパスされたなら、すべての攻撃側選手は同時に動きはじめる。

3、ブロックをするプレーヤーはボールをもたず、突っこむこと。

4、ボールをパスされたプレーヤーはゴールに向って、力強く、速い動きをし、シュートモーション（ジャンプ・シュート）を見せる。

このことによって、防御側のプレーヤーは引きつけられてしまう（もしこなければ、シュートして確実に決めることが肝要）。

5、パスをする前には、必ずシュート・フェイントをかけることが重要な要素となる。

6、この時隣にいたプレーヤーはシュート・フェイントによって生じる守備のスキにすばやくとびこむ。

第 3 図

第 4 図

7、全てのプレーヤーが戦術の意図するところ、意味するところを十分に熟知していることはどうしても必要となる。

実際の動き（第2図参照）

1、選手3と選手4はお互いにピタリとくっつき、フリースローラインで相手に背を向け、位置について、相手の視線からボールをさえぎる。

その間、強力無比のシューターである2の選手（これをノーマークにしたら必ずシュートが決まるというチームきっての大砲をこの位置に置く）はボールをもらうため、3と4の選手の後に位置をとっている。

2、引きつづいて2の選手にパスが渡る。

選手の2はゴールに向って、走り、相手を引きつけてしまう。

その間、ブロックが任務となっている4番の選手と6番の選手はそれぞれブロックする選手めがけて、走りこみ、しっかりと相手選手をブロックする。

3、サイドに位置していた選手7は、6と4によって作られた穴に入り、充分に相手選手をひきつけた選手2からパスをもらう。ここで7の選手は完全なノーマークになる。2と7によって、一人の守備選手をはさむことになるので、7か2のどちらかがノーマークになる。

このフリースローのフォーメーションは同じ形の展開によって、多くのフォーメーションに変化することができることである。やや走る方向を変え、パスする方向をかえ、その組み合わせを変えると千変万化することが可能となる。この変化には、チームの選手全員が、戦術に深い理解をもっていると同時に、味方の選手が何を考え、何を意図しているかを知るチームワーク、更には変化に対処できるだけの頭、眼、体を含めた高い技術をもっていることが最低条件となろう。

変化の例A（第3図参照）

1、3と4は第2図と同様に並んで立ち、ボールをもっている以外の選手も第2図と全く同じポジションをとっている。

3はボールを2にパスした後ですぐ、3人からなる守備の壁に向って走りこみ、この壁をそのままの位置に釘づけにする。

4は前と同じようにブロックに入っていく。

2、ボールをもっている2はドリブルして入っていき、相手を引きつける。シュートフェイントを行ない、守備の選手を完全に引きつける。

3、隣りにいる選手6、7は平行して、ゴールに向って走る。

前のこの動きによって、6と7は防御側のサイドの選手1人を挟み打ちにする形になる。6に2からパスが渡る。この時、6にマークがなければ、そのままシュートする。6にマークがつけば、7にパスを送り、7がノーマークになりシュートする。

変化の例B（第4図参照）

1、配置は前のものと全く同じになる。同じ配置からいくつもの変化を可能にするのが、このフォーメーションの特徴である。

3と4はボールを2にパスしたらすぐに守備の壁に向って走りこみ、ここで守備の壁を作っている三人の防御選手をしっかりとブロックしてしまう。

2はボールを受けた後、前と同様に、ボールを6にパスする。2に守備側選手が余りつかない場合にはシュートを行なう。2、6は守備選手を十分に引きつけ、シュートフェイントを行なう。

2は守備のスキに走りこみ、6からパスを受けとる。

同時に7もスタートを起こし、防御側のサイドの選手が2をマークしにいった時には2からパスをもらい、ノーマークになる。

これを基本形にしてさらに新しいフォーメーションを開発し、フリースローを絶対のチャンスにすることが望ましい。

男女ともルーマニア

初の世界ジュニア選手権

世界ハンドボール界の新しい試みとして注目を集めていた第1回世界ジュニア選手権(18才～21才)は、3月4日からオランダのアムステルダムで開かれ、男女ともルーマニアが快勝、初の栄冠に輝いた。

先に行なわれた世界選手権大会では、ヨアン・クンスト氏のもとに、ルーマニア第一期黄金時代を築いたモーゼル以下の選手に衰えが見られ、若手との交替が順調に運ばず、惜しくも三位にとどまったルーマニアは、世界選手権においてもベスト・セブンに選ばれたグルイアをはじめとして、着々と新しい戦力を産みだしはじめている。

徹底したハンドボール学校による練習には、すでに定評のあるこの国が世界選手権で敗れはしたがいぜんとして、その力は世界のトップレベルにあることを示したものとして特筆されよう。

すでにルーマニアは男女とも同時に世界選手権を保有したこともあり、数年して再び第二期の黄金時代を現出するのは間違いのないことと考えられる。

東欧、北欧にドイツを加えた世界の列強がここでも覇を競っており、伝統の重さをひしひしと感じる。

ミュンヘン・オリンピックを控えて、各国のジュニア強化が積極的な時期だけに、今後のこの大会の動向は興味深いものがある。

▽男子11・12位決定戦
スイス 19－8 ベルギー

▽同9・10位決定戦
スペイン 20－20 ハンガリー
＝引き分け・両国9位

▽同7・8位決定戦
オランダ 13－8 オーストリア

▽同5・6位決定戦
ユーゴスラヴィア 23（11－5、12－9）14 スウェーデン

▽同3・4位決定戦
西ドイツ 17（11－10、6－6）16 チェコ

▽同決勝
ルーマニア 22（7－5、15－3）8 ポーランド

▽女子3・4位決定戦
チェコ 13（7－3、6－2）5 スウェーデン

▽同決勝
ルーマニア 10（4－2、6－5）7 ハンガリー

ヨーロッパカップ大詰へ

ヨーロッパ諸国の選手権チームによって毎年争われている今年度のヨーロッパカップトーナメント（男子第8回、女子第7回）はいよいよ大詰を迎えた。

各国の選手権チーム同志の激烈な戦いを勝ち抜き、ベストフォアに残り、準決勝、決勝を勝ち栄あるヨーロッパカップを手にせんとしているチームは次のとおり。

男子では、ルーマニアナショナルチームの主体をなし、常勝とまでいわれているディナモ・ブカレスト（ルーマニア）、スパルタカス・ブタペスト（ルーマニア）今回の世界選手権チームにも選手を送っているデュクラ・プラーグ（チェコ）初のリーグ戦形式によるドイツ国内の試合を勝ち抜いたVFL・グンメルスバッハ（西ドイツ）、選手権試合でも独特のフォーメーションを見せたソ連を代表するツルド・モスコー（ソ連）が残っている。

女子はボヘミアンズ（チェコ）昨年の勝者、SC・ライプチッヒ（東独）、ティミ・シオアラ（ルーマニア）、スパルタカス・ブタペスト（ハンガリー）となった。

4月中に優勝チームが決まる予定となっている（詳細は次号）。

従来のヨーロッパ・カップの優勝・準優勝チーム

男子

第一回（一九五七年）
優勝 プラーグ市民チーム
二位 オレブロ

第二回（一九五九年）
優勝 RIK・ゲーテボルグ
二位 FA・ギョッピンゲン

第三回（一九六〇年）
優勝 FA・ギョッピンゲン
二位 KFUM・アールフス

第四回（一九六二年）
優勝 FA・ギョッピンゲン
二位 パルチザン・ブェロバル

第五回（一九六三年）
優勝 デュクラ・プラーグ
二位 ディナモ・ブカレスト

第六回（一九六五年）
優勝 ディナモ・ブカレスト
二位 メドベルスク・ザグレブ

第七回（一九六六年）
優勝 DHfK・ライプチッヒ
二位 ホンベッド・ブダペスト

女子

第一回（一九六一年）
優勝 スチインタ・ブカレスト
二位 ディナモ・プラーグ

第二回（一九六二年）
優勝 スパルタク・プラーグ
二位 ORK・ベルグラード

第三回（一九六三年）
優勝 ツルド・モスコー
二位 フレデリクスベルグIF

第四回（一九六四年）
優勝 ラピッド・ブカレスト
二位 ヘルシンガー・IF

第五回（一九六五年）
優勝 HG・コペンハーゲン
二位 スパルタクスブダペスト

第六回（一九六六年）
優勝 SC・ライプチッヒ
二位 HG・コペンハーゲン

IOC室内競技の冬季移行を協議

IOC（国際オリンピック委員会）では、オリンピックの正式種目がふえ、夏季大会の規模が大きくなっているため、夏季大会競技の一部を冬季大会へ移そうという案を進め、フインランドのフレンケル氏を委員長とする小委員会によって検討が加えられていたが、このほど同委員会は正式種目のうちハンドボール、バスケットボール、柔道、バレーボールなど室内種目9競技を冬季への移行可能な競技として結論、5月5日からテヘランで開かれる第65回IOC総会の議題として協議されることになった。

3月4日付・読売は「同委員会が意見を求めたところ、バレーボールと柔道だけが未回答で、他の七競技は、全部冬季への移行を拒否し夏季（一九七二年はミュンヘン）で行なわれることを希望している」と伝えている。

一部の競技が冬季に移行されるとなると、その最初の開催地は一九七二年の札幌ということになる可能性が強く、ハンドボール関係者にとってもテヘラン総会の動向はみのがせぬものとなった。

IHF日本チームを激賞

第6回世界男子7人制選手権に参加した日本は、前回同ようノルウエーから1勝をあげたものの、宿願のベスト・エイト（決勝トーナメント）出場はまたしてもならなかった。

しかし日本の成長は本場ヨーロッパ関係者の目を驚ろかしており近着のIHF公報65号（二月号）は次のような批評をかかげている。

※　※　※

日本は充分に練習のつまれたその組織的なフオーメーションを駆使して参加したヨーロッパ諸国の中でも高く評価されうるレベルを示した。

地理的な条件から国際交流の不足している日本にとって、世界選手権に参加することは貴重な体験となっているようだ。

しかも、この大会に参加するたびに多くの教訓を得て役立てていることはみごとだ。

今回の日本チームにあって木野（立大）、飯端（関学=今春卒業）の両選手はヨーロッパのどのナショナルチームの選手にもみられない秀れたプレーを見せた。

日本は、経験の不足を積極的な攻撃（多数のシュート）を展開することによって補おうとしておりこの作戦はかなり成果をあげている。

失点が多いことを批判する者もいるが、その得失点比は決して悪いとはいえまい。

日本チームがプレーした多くの会場では、その鋭敏でスラリとした選手たちの動きに観衆の支持が集った。

日本選手がコートにいるだけでハンドボールそのものの内容が豊かに感じられた。日本チームは試合の結果に出た点数では〝計算〟することのできない強みを持っているといってよいだろう。（境井）

好敵手（ティデマン（左）とミョーライゼン（右））
—東独と西独の試合から—

時評

鈴木一荒川ラインの今後

ガラス張りの政治を期待

鈴木（会長）—荒川（理事長）ライン。

ともになるべくしてなった感じの人事だ。

内外に多くの問題をかかえた今日のハンドボール界にあって、これ以上の適任者はいまい。

両氏には、まことにやっかいな時期に要職につかれたわけでその苦労もなみたいていではないだろうが、存分にその手腕を発揮していただきたいものだ。

ところで卒直に云って、両氏を除いては今回発表された新人事の大勢は〝政変〟のあとにしてはまったく新鮮さがない。

刷新を期待していたムキは裏切られたようなものだが旧人を思い切って執行部からはずす勇気がなかったのか、それともとってかわるべき〝新しい世代〟に人材が見当らなかったのか——いずれにせよ情ない話だと思う。

鈴木—荒川ラインの苦しさも実はこのあたりにありそうで、いく本かのもつれた糸をどうときほぐすか骨がおれることであろう。

理事長が与党ともたのむべき常務理事会や全国理事会の思わく、人の動きにまず気を配らねばならないのは正しい姿ではない。

もっとも、この混乱期に立てるのは荒川氏以外にないという声もある。

新ラインに一番強く望みたいのは、ガラス張りの政治をして欲しいということだ。

特に地方協会に対しては、くどすぎると思はれるほどその連絡を密にしてもらいたい。

高嶋氏辞任の時も、地方協会はコトの成り行きさえまったく判らず、2月の全国理事会で多くの地方役員が、常務理事を詰問したほどだ。

中央への不信は想像以上に強いものがある。

これを軌道に戻すには、新ラインが、今後の施政方針を明らかにすると同時に地方との連係を密接にすること以外にあるまい。

そのためになら少々鈴木—荒川ラインの〝独走〟が許されてよいとさえ思う。

鈴木会長は、『文句がある者は遠慮なく云ってほしい』としているようだが、口ばかりで実行力がともなわないのが、これまでのハンドボール界であった。

もつれた糸のどの部分をときほぐすのが〝発展〟につながるか。その取捨選択は鈴木—荒川ラインそのものを決定ずけることになろう（S・S）

★　★　★

思いつくまま

西ドイツチームの来日に思う

○…西ドイツのチームがくることになったことは、難局にたっている我がハンドボール界にとって、極めて意義深いものがあろう。

東ドイツと西ドイツに国が分れているのは、非常に不幸なことである。しかし、両国の間で交流があるのは一つの明るい面であろうが、最近しばしばスポーツの場が外交関係のない国々の間の交流に使われるのでなく、それを阻害する方向に動いていることは非常に残念なことである。

ハンドボールの世界も例外でなく、スポーツの世界に外交関係がもちこまれたことが一、二ある。

私達スポーツマンは何も他のことで交流するのでない。多くの国々とスポーツを通じて、親善を深めていきさえすればいいのだ。

政治経済ブロックのワクを越えて、一日も早く自由なスポーツ交流がきるような日がくることを望みたい。

▽…ジェット機の時代になって、すでに十数年、世界は狭くなったと云われている。ハンブルグから東京に飛ぶより、汽車で九州、北海道の端にいくほうがずっと時間がかかる。そうはいっても、ヨーロッパは遠い。ハンドボールの故地、ヨーロッパでは、毎年盛んにナショナル・チーム同志、あるいはクラブチーム同志の試合が行なわれている。国際試合など日常茶飯事のことだ。遠いところでも、汽軍に乗り、眠っていれば着くぐらいの距離なのだから。我国の全国大会に行く程度のことで、国際試合ができるのだから、うらやましい。

西ドイツチームにとっては、大遠征であろう。あこがれの東洋といったところだろうが、日本だけでしか試合をしないのは残念なことだろう。アジアにもより多くのチームができ、ハンドボールが普及し、気軽に国際試合ができるようになってほしいものだ。

▽…西ドイツのチームはもっともオーソドックスなプレーをすることで知られている。我国のレベルも7人制1本化で非常に高くはなっているが、世界選手権の時に欧州遠征をした人以外は直接、世界の一流チームのハンドボールに接っする機会は得られない。

僅かに種々のものを通じて、間接的に入ってくる知識を利用することしかできない。今度の西ドイツチームを見るのと見ないのとでは大きな違いがでてこよう。多くのハンドボールマンがこのチャンスを逃さずに、試合をし、その技術・戦術を消化し、それを超えていくことが必要であろう。（TS．F．）

関大、同大の天下くずす

西日本学生 秀れた攻撃で初優勝

シーズンの開幕を告げる第7回西日本学生選手権は4月6日から9日まで京都市立体育館に21校（関西17中四国4）が参加して開かれ、進境いちぢるしい関大が、同志社大の3連勝をはばみ初優勝を飾った。

▽1回戦

京大 19（11－8 8－9）17 岡山大

大阪学芸大 27（14－6 13－9）15 大阪歯大

神戸大 19（11－7 8－5）12 京都教大

大阪市立大 46（25－2 21－4）6 大阪薬大

大阪府大 21（9－5 12－3）8 立命館大

▽2回戦

大阪経大 18（8－7 10－7）14 大阪大

同志社大 29（15－2 14－3）5 京大

神戸大 21（10－6 11－4）10 大阪学芸大

甲南大 29（15－2 14－2）4 広島大福山

関学 22（10－4 12－5）9 大阪市大

桃山学院大 19（10－8 9－5）13 大阪体大

山口大 18（12－7 6－5）12 広島大

関西大 35（20－4 15－7）11 大阪府大

▽準々決勝

同志社大 14（7－3 7－5）8 大阪経大

甲南大 24（8－4 16－3）7 神戸大

関学 18（7－9 11－5）14 桃山学院大

関西大 16（11－4 5－4）8 山口大

○…大経大、桃山学院大、山口大の善戦が注目された。

結果的には大差となったが山口大の健斗はともすれば関西学生春季リーグの前哨戦になり勝ちな本大会を意義づけたといってよい。

同大、関学はシーズンはじめのせいか不安定な運びで楽な試合ぶりとはいえなかった。

▽準決勝

同志社大 26（15－4 11－5）9 甲南大

【同大】

	選手	得
GK	和保	0
GK	二橋	0
FP	守本	1
FP	稲葉	1
FP	佐藤	3
FP	舟木	6
FP	飯田	7
FP	蒿品	0
FP	松浦	4
FP	高橋	1
FP	中井	4

【甲南】

	選手	得
GK	和田	0
FP	平戸	1
FP	川渕	0
FP	森田	1
FP	酒井	1
FP	吉川	2
FP	久光	4
FP	置田	0
FP	国島	0
FP	松本	0

9（0）7MT（1）26

○…久光のゲットで甲南大は幸先よいスタートを切ったが、同大はすぐ舟木—飯田のコンビで連続得点、12分5—1とリードした。

甲南大もよく粘り平戸のリードを活かして19分に5—5とタイに追いついたが、そのあとデイフェンスの甘さをつかれて、20分以後に7点を失う深傷を負い敗れた。同大の実力勝ち。

関西大 17（10－5 7－6）11 関学

【関大】

	選手	得
GK	平松	0
GK	西口	0
FP	多賀谷	2
FP	馬着	2
FP	武田	3
FP	長野	3
FP	加古	2
FP	成田	0
FP	西脇	5
FP	松田	0
FP	小川	0

【関学】

	選手	得
GK	松田	0
GK	木村	0
FP	永井	1
FP	西野	4
FP	喜田	4
FP	辻本	0
FP	佐藤	0
FP	森口	0
FP	大本	0
FP	真砂	2
FP	細井	0

11（1）7MT（1）17

○…関大は前半関学のペースに乗せられて苦しんだが後半は西脇、武田が鋭いシュートを決めて点差をひろげた。

西脇の進境で昨年末の全日本選抜選手権当時よりも、さらにムラのない攻撃陣が出来あがったようだ。

関学は飯端のアナ（卒業）を喜田の強肩と西野の巧技で埋めているが、あと一息迫力が欲しい。

▽3位決定戦

関学 20（13－5 7－5）10 甲南大

○…前半なかばまでは甲南大がリードしたが、関学は西野の活躍で試合の主導権を奪いかえし、守っても激しいつぶしをみせてそのまま押しきった。

▽決勝

関大 17（5－8 12－3）11 同志社大

【関大】

	選手	得
GK	平松	0
GK	西口	0
FP	多賀谷	2
FP	馬着	4
FP	武田	2
FP	長野	3
FP	加古	3
FP	宮永	3
FP	松田	0
FP	西脇	0
FP	小川	0

【同大】

	選手	得
GK	和保	0
GK	二橋	0
FP	守本	2
FP	稲葉	1
FP	佐藤	1
FP	舟木	0
FP	飯田	4
FP	蒿品	0
FP	松浦	0
FP	高橋	0
FP	中井	3

11（0）7MT（1）17

○…昨年の決勝と同じ顔合せ。3連勝を狙う同大が僅かに有利とみられたが、関大の立ちあがりはあざやかで2分長野、3分馬着のゲットで2—0。4分同大中井に1点を許したが、そのあと一気に6点を連取する攻撃で20分には8—1と大きくリード、試合の主導権を握った。

○…同大は、後半猛反撃をみせたが。後半13分8—14としたまでが精いっぱい。あまりにも前半の失点が大きすぎた。

飯田をマークされるともろさがのぞくのは、シーズン初めのためと思われるが反省されてよい。

○…関大は関学・同大二強を倒しての栄冠で喜びも一しお。学生界で優勝を飾ったのは38年春の関西学生リーグ以来のことだ。攻守のバランスがよくとれ、特にムラのない攻撃陣は今年の活躍が大いに期待される。

なお同大が昭和40年春季関西学生リーグ第6日（関大戦）以来つづけていた対西日本学生チームの連勝記録は33でストップ。（駒沢）

日本協会、30回目の誕生日

昭和13年2月2日に結成された日本ハンドボール協会は今年30回目の〝誕生日〟を迎えた。

協会では43年2月に「30周年記念事業」を行う計画を進めている。

球界パトロール

異色の新人（?）登場

横浜・静岡

○…先シーズン最後を飾る二つのブロック選手権大会で異色の新人（?）二人が登場して話題になった。

その一人は御存知東京オリンピックの陸上銅メダリスト円谷幸吉さん。

3月25日・26日横浜市文化体育館で開かれた関東実業団選手権に自衛隊体育学校（埼玉）のメンバーの一員として、ベンチ入りしたもの。

試合前、メンバーをうけとった本部役員席では「同じ名前は良くあるものだ」ぐらいに思っていたが、同チームがコートに姿をみせるとまさに、ホンモノの円谷選手。

相手チームであった和同建設（神奈川）の選手はもとより各コートに散った選手たちもしばし練習をやめて円谷選手の練習ぶりを見つめるという珍しい場面となったが、ご当人は冗談まじりに「もう陸上競技は廃業して、これからはコレ（ハンドボールのこと）に転向ですよ」とてれくさそうにしていた。

スタンドおよびコートについた選手達の期待を裏切って試合には最後まで出なかったが、陸上の新コーチに決まった宮下宮実氏がかつて関大の名GKであった関係でこれからもできるだけハンドボールをつづけたいとか。

我国のハンドボール界はいま六年後に行なわれるミュンヘンオリンピック出場をめざして懸命だがひとあし早くオリンピック・メダリストのプレーが今シーズンはどこかで見られるかもしれない。

○…もう一人は中京クラブから東海室内選手権に出場した（愛知）の宇津野年一さん。

女子界の雄・田村紡（三重）をきたえあげた名コーチで、その著書「ハンドボール教本」に展開した理論は多くの反響を呼ぶなど球界きっての指導者だ。

その宇津野氏が教え子たちのつくった中京クラブの一員として、東海室内選手権（2月18日・静岡）で『10年ぶりに公式戦出場＝本人の話』したのだからコートの人気をさらったもムリはない。

若い選手たちにまじって、もうカミの毛もだいぶうすくなっている宇津野氏だが、プレーの方は後輩顔負けの若々しさ。

スタンドの田村紡選手が「先生、シュートを見せて」とさかんな応援をおくる、相手チームは往年の名手カムバックとあって必死のマーク。まだまだ出来ますよという後輩たちの声にそうごうをくずし笑う宇津野氏の表情からはまったく〝トシ〟を感じることが出来なかった。

☆　☆　☆

球界パトロール

ハンドボール人口は三万五千

—日本体育協会—

○…日本体育協会競技力向上委員会は昨年6月1日から約1年がかりで全国の中学、高校、高専、大学、一般（会社員、教員など）を対象にしてアマチュアスポーツ41種目にわたり、大がかりな「スポーツ人口調査」を進めていたが、このほどの統計がまとまり、同委員会から発表された。

○…それによると日本のスポーツ総人口は五百四十四万五千百五十五人で、国民の二十人に一人がスポーツ・マンという結果が出ている。

種目別にみて、もつとも国民のあいだに普及しているのは軟式野球で、ハンドボールは22位。

いちぢるしい伸びを見せたといはれるものの、〝まだまだ〟の印象は否めない。

○…ハンドボール人口のうち81パーセントは高校で、今後人口を増すためには大学・一般の愛好者拡大を強力に推進していかなければなるまい。

本誌をはじめ各所で提唱されているOBリーグ、クラブリーグなどを積極的に押しすすめていくのも一策だろう。

一般の総計（四六七七人）をブロック別にみていくと、東北・北海道四二〇、関東九五六、東海八四四、北信越四九〇、近畿一〇九六、中国三二八、四国一一三、九州四三〇ということになり、傘下4県の東海が実質的なトップといえる。

○…大学部門はこの調査によれば男子一四六四人、女子一五六人、チーム（団体）数七九となっており一チーム平均二十人の部員とみられる。

団体数を種目別にみると卓球、(三七〇）がトップ、以下軟式庭球、バレーボール、バスケットボールとつづきハンドボールは15位。学連関係者は目標の男女百チーム実現に努力をつづけて欲しい。

高校部門（中学・高専を含む）の充実はこの調査を待つまでもなく自他ともに認めていたことで〝底辺拡充〟政策が実ったものと判断してよいだろう。

この部門の総計内訳は男子一一〇九二、女子五八五一、中学一一二二三、高専一二二人となっており、高校女子は同男子の半数。開拓の余地は充分で、一そうの発展が望める。

○…注目してよいのは中学（男女）が、高校男子の総数を上廻る数字を示したことだ。

日本ハンドボール協会普及部の報告では、41年度全国で54の中学チームが新設されたというが、球界悲願の〝中学正課体育〟に復活されれば高校界とともに、球界の底辺として重きをなすことになろう。

○…今回の調査をもとにして協会新執行陣は新なる普及対策をこうじると伝えられているが、とりあえず高校以下四万、一般・大学一万ほどの目標数字を示してみたらどうだろう。

IHF(国際ハンドボール連盟)に登録された各競技人口のうち三万人以上の国は日本のほか東西両ドイツ、デンマーク、ハンガリー、オランダ、スウエーデン、ソビエト、ユーゴの九ケ国である。

○…なおこの調査は指導者（指導教職員）数についてもふれており、ハンドボール指導職員（高専高校中学小学）は九八〇四。指導者のいる学校数は五一七一となっている。

スポーツ人口調査

▷競技別人口（男女）総計

①軟式野球	824728人
㉒ハンドボール	34585

〔参考・主なボールゲーム〕

バレーボール	612080
バスケツト	413770
サツカー	103204
ホツケー	4593

▷大学競技別人口

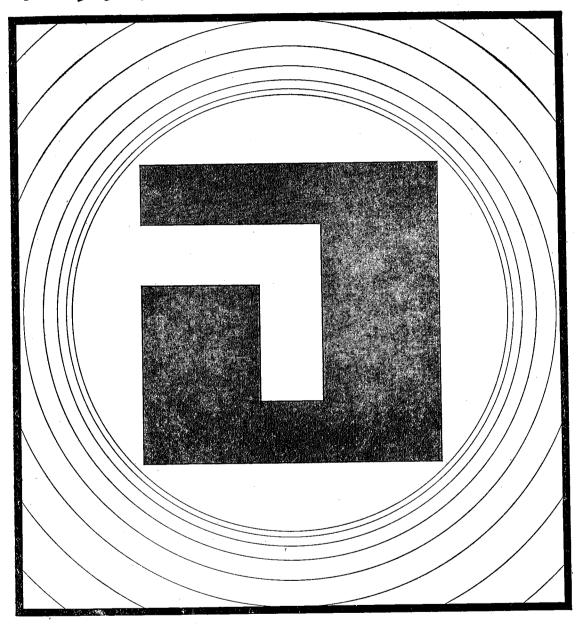
①漕　艇	11761
⑳ハンドボール	1620

▷一般競技別人口

①軟式野球	577415
㉘ハンドボール	4677

▷高校競技別人口（含中学，高専）

①バレーボール	575991
⑱ハンドボール	28288

日本体育協会競技力向上委・3月14日発表

連載 第31回

ハンドボール球史

～球界を動かした人たち～

日本ハンドボール協会は空席だった会長に鈴木達雄氏を、理事長に荒川清美氏をこのほど決め発表した。（別面詳報）

鈴木会長は4代目、荒川理事長は8代目にあたり、難問題をかかえた球界をどうリードしていくか、その手腕が期待されているが、今回の球史は特にこれまで30年の歴史を刻んだ球界の首脳陣を並べてみることにした。

陸連内に準備委員会

日本ハンドボール協会の創設を急がしたものは昭和15年に東京で開かれるオリンピック大会であった。

同大会は昭和6年に招致が決まり、同7年ＩＯＣ（国際オリンピック委員会）に名乗りをあげたあと同11年7月、正式決定されたもので、昭和11年のベルリン・オリンピックで史上初めて実施されたハンドボールは、当然この東京大会でも行なわれるとして関係者の間で準備が進められた。

しかし大正末期に導入された競技とはいえ、一般スポーツとしての実績は無に等しく、そのため日本陸上競技連盟の中にハンドボール（注・当時は送球と呼称）の専門パートを設けることになり、昭和9年「日本送球協会創設準備委員会」が発足した。

委員長には日本陸上競技連盟会長平沼亮三氏（故人）、副委員長には大谷武一氏（故人）が就任、大谷氏は日本にハンドボールを伝えた人としてあまりにも有名である。

新しい競技への理解に満ちた両氏を中心とした準備委員のかたがたの努力がなければ、今日の日本ハンドボール界は存在しなかったろう。

【日本送球協会創設準備委員会＝昭和9年日本陸連内に設置】

▽委員長 平沼亮三 ▽副委員長 大谷武一▽委員 中園進、浅野均一、安田弘嗣、鈴木武、塩沢幹、酒井将、三藤正、今村嘉雄、山県七郎、竹田徳二、保坂周助。

このメンバーのほとんどの方はその後も何らかの立ち場で日本ハンドボール界の発展と育成に力ぞえされ、保坂周助氏（日本体協理事、現神奈川県ハンドボール協会長）は今年度から日本協会副会長に就任された。

昭和13年に日本協会

さて陸連内の一パートとして胎動期をすごした日本ハンドボール界は昭和12年末、関東選手権、全日本選手権が相ついで開かれるなどその活動もようやく軌道にのり昭和13年2月2日待望の「日本送球協会」が設立され、同時に一切の権限が陸連から新協会に円満譲渡された。

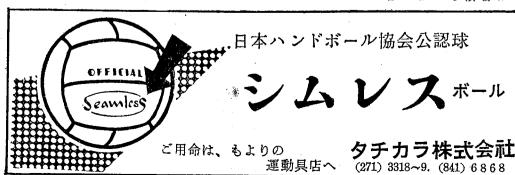
初代会長には準備委員長としてほん走された平沼氏が、副会長には大谷氏がひきつづき就任、専務理事（理事長）には中園進氏（故人）が選ばれ11人の理事が決められた。

【日本送球協会初代首脳陣＝昭和13年2月】

▽会長 平沼亮三▽副会長 大谷武一▽専務理事 中園進▽理事 浅野、安田、鈴木、塩沢、酒井、今村、山県、保坂、塚本簾之助、杉浦卯三、石津誠。

同年5月には関東学生ハンドボール連盟も発足、将来への発展に多大な希望がよせられるうちにスタートは切られたわけだが、同年7月戦争による情勢変化で東京オリンピックが返上されることになり、この大会で新生の意気を一挙に発揮しようとした球界を失望させた。

しかし国内にまかれた芽はその後も順調に伸び、13年後期から14年にかけてはハンドボール界育ちともいうべき人たちが第一線に立つようになった。鶴岡英吉、外山准二、阿部二郎などで大谷、中園、酒井氏ら先輩とともに力をつくした。

昭和15年4月に改選されたスタッフからは陸連出のかたがたは姿を消し、名実ともにハンドボール界の独立を示した。

会長も平沼氏の勇退から元ドイツ大使でIOC委員としてスポーツ界にも力のあった永井松三氏（故人）に代り、理事長（専務理事）も中園氏から松本良三氏（慶大部長）に引きつがれた。

理事陣も学生ハンドボール界の若いOBが顔を揃えたが、短時日にしてここまで成長を遂げたかげには、日本スポーツ界の父と敬れた平沼初代会長の人望と力、それに陸連関係者の好意的な態度によるものと感謝せねばならない。

【第2期スタッフ＝昭和15年4月】

▽会長　永井松三▽理事長　松本良三▽理事　池上金治、外山准二、的場益雄、肥後淑人、三好京一郎、林厳。

戦火で組織がえ

昭和17年に役員の改選が行われ理事長に斉藤一男氏が就任。斉藤氏は昭和13年発足当時、協会参与として球界に関係されていた人。

【第3期スタッフ＝昭和17年4月】

▽会長　永井松三▽理事長　斉藤一男▽理事　池上、的場、肥後、三好、林、鶴岡英吉、徳永陸繁。

この頃から戦火が激しくなり、日本スポーツ界も多くの影響をうけ昭和17年10月すべての競技団体は大日本体育会に一括され、各専門部会ということになった。「大日本体育会送球部会」の発足がそれである。役員も永井会長が部会長ということになり、執行部は第3期スタッフに高嶋洌氏が加わるなど若干の異動があった。召集などをうけて姿を消す人も目立つようになり、やがて〝開店休業〟状態からちりぢりになって昭和20年8月の終戦を迎えた。

終戦――ただちに復活へ

戦争が終わるやハンドボール人たちはまっさきに「球界復活」を考えた。誰が指揮するかというわけでもなくそうした情熱が一つの固まりになるのに時間はかからなかった。

日本体育協会発行「スポーツ80年史」（三七七頁）によれば、こうして自発的な集まりをつくった人たちは池上、的場、肥後、三好、徳永、高嶋氏らの前理事のほか、井出俊六、宮崎慎六、森岡一衛、西敏郎、島田清、八百慶三、小川勇、林和氏ら関東学生界のOBであったという。一方関西でも馬場太郎氏を中心とした人々の熱意が集まり、期せずして東西に咲いた情熱の実は昭和21年1月東西対抗戦（西宮）の開催という形に結ばれた。

この試合を機に正式に復活準備委員会が発足することになり、関東側の人たちがそのメンバーになった。

【日本送球協会復活準備委員会＝昭和21年2月】

▽総務委員　池上、的場、宮崎慎、井出、外山▽専門委員　氏名略

5人の総務委員は常務理事会的性格でその活動をまとめた。

サトウハチロー氏が一役

会長（3代目）に東京タイムズ社長の式場隆三郎氏（故人）が決まったのは昭和21年も間もなく秋になろうとする頃であった。

国民体育大会の構想が明らかにされると、復活準備委員の仕事も急ピッチに進み、会長には普及面からみても報道界の実力者ということで式場氏へ白羽の矢が立ったものである。

式場氏の快諾を得て事実上日本協会の復活はなった。つづいて理事長として式場氏の関係から佐藤八郎氏（詩人サトウハチロー）が登場した。文壇・詩壇きってのスポーツ通といわれていた佐藤氏の〝顔〟は復興をめざす球界に有形・無形のプラスとなったが、運営の実践は事情に通じた的場、池上、外山の三氏が協力して補佐することになり、次のようなスタッフが戦後最初の執行部として発表された。

【日本ハンドボール協会復活第1期スタッフ＝昭和21年度】

▽会長　式場隆三郎▽理事長　佐藤八郎▽常務理事　池上、的場、徳永、小川、高嶋、井出、森岡、外山、林、八百、宮崎慎。

復活初代のスタッフが手がけた仕事のうち、ここに特筆しなければならないのは式場会長の強い提唱で「送球」の呼称を「ハンドボール」に変えたことと国体への参加である。

翌22年になって協会組織活動の円滑をはかるため常務理事数を縮少し理事を増員することになり、関東（特に東京）中心であった理事の選出を全国的規模へ広げた。

これは、それまでの協会が関東（東京）中心というわけではなくようやく地方協会（支部）が確立されたことを意味するものであった。

【第2期スタッフ＝昭和22年度】

▽会長　式場隆三郎▽理事長　佐藤八郎▽常務理事　的場、徳永、井出、外山、宮崎慎、馬場太郎。

選手出身の理事長

昭和23年度から理事長の任は外山准二氏（現・東京協会理事長）が担当した。外山氏は慶大初代主将。ハンドボールプレイヤー出身の最初の理事長であった。

【第3期スタッフ＝昭和23年度】

▽会長　式場隆三郎▽理事長　外山准二▽常務理事　的場、徳永、宮崎慎、馬場、高嶋洌、西敏郎。

この頃から、球界の復興もようやく軌道にのり、新しい学制により高校球界の誕生など底辺の拡充にも曙光を見出した。

協会業務もシーズンごとに広が

り、昭和24年度には宿願の全日本選手権（昭和17年で断絶）が全日本総合選手権の名で復活、役員も新たに副会長のポストが設けられ、理事陣も増員した。

【第4期スタッフ＝昭和24年度】
▽会長　式場隆三郎▽副会長　馬場太郎▽理事長　外山准二▽常務理事　的場、徳永、宮崎慎、高嶋、西、林和、大川潤、山田計、佐久間義雄。

昭和25年度は高体連ハンドボール部が発足した年。本部協会首脳陣に大きな変動はみられなかったが、新理事長荒川氏はこの年に初登場。

【第5期スタッフ＝昭和25年度】
▽会長　式場隆三郎▽副会長　馬場太郎▽理事長　外山准二▽常務理事　的場、徳永、宮崎慎、高嶋、西、林和、大川、山田計、佐久間、池上金治、若崎重富、荒川清美。

任期2年に変わる

昭和26年度から協会業務の一貫性・計画性を強めるため役員の任期が2年に改められた。

また副会長を2名とすることになり。河島武四郎氏（当時高体連ハンドボール部会長）がこのポストに加つた。

【第6期＝昭和26・27年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　馬場太郎、河島武四郎　▽理事長　外山准二　▽常務理事　的場、徳永、宮崎慎、高嶋、西、大川、山田計、佐久間、若崎、荒川、吉田正次郎

昭和27年9月待望のＩＨＦ（国際ハンドボール連盟）への復帰が認められ、同年開かれたヘルシンキ・オリンピック時に外山理事長をヨーロッパ球界の視察に派遣。外山氏は帰国後、新時代を迎えた球界の将来を考えて退任した。28年2月の改選で理事長には西敏郎氏を選出。西氏は戦前慶大黄金期をつくった名ＦＷでその新鮮な国際感覚を高く買われた。

【第7期＝昭和28・29年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　馬場太郎、河島武四郎　▽理事長　西敏郎（28年度のみ）、高嶋冽（29年度から）▽常務理事　外山、的場、徳永、宮崎慎、山田計、佐久間、荒川、吉田、神田清、花畑平男、（高嶋）、（西）。

才腕・高嶋氏が登場

西理事長は昭和28年秋に当時世界最強の西ドイツ選抜軍の招へいを実現させるべく積極的な手をうち、来日濃厚となったが、経費の捻出にあと一歩の裏づけがなく断念し、西氏はあっさり退任してしまった。

このため高嶋冽氏が理事長を代行したあと、29年度から正式に理事長となりいわゆる〝高嶋時代〟の幕あけとなる。

高嶋氏は戦前日体で強肩ＦＷとして鳴らし戦後も永く第一線で活躍。一方行政面でも審判長などで秀れた手腕を発揮、球界内外から多大の期待が寄せられる中での登場だった。

以後41年11月まで実に7期（通算13年7ヶ月）にわたって理事長の要職をつとめ前任者西氏のまいた国際交流の種を鮮やかに実らせたほか七人制一本化、世界選手権への参加、実業団球界の育成を次々に実現した。

この期間に惜しまれるのはオリンピック東京大会の開催種目からはずされたことと、式場会長、大谷武一氏があいついで鬼籍に入ったことであろう。

第8期（昭和30・31年度）以降のスタッフは次の通り

【第8期＝昭年30・31年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　馬場太郎、河島武四郎、出口林次郎（31年度から）▽理事長　高嶋冽　▽常務理事　西、的場、徳永宮崎慎　山田計　佐久間　荒川、吉田、神田、花畑（30年度まで）若崎重富、宮崎慎一郎、松本重雄（31年度から）

【第9期＝昭和32・33年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　出口林次郎　▽理事長　高嶋冽　▽常務理事　的場、徳永、荒川、若崎、宮崎顕、松本、山岡二郎、池田澄、加藤祐策

【第10期＝昭和34・35度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　出口林次郎　▽理事長　高嶋冽　▽常務理事　的場、徳永、荒川、松本、山岡、中沢重夫（35年度から）

【第11期＝昭和36・37年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　出口林次郎、馬場太郎（37年度から）▽理事長　高嶋冽　▽オリンピック東京大会選手強化対策委員　荒川清美（36年度のみ）▽常務理事　的場、徳永、荒川、松本、山岡、中沢、吉田正次郎（37年度から）、若崎重富（同）、宮崎顕一郎（同）

【第12期＝昭和38・39年度】
▽会長　式場隆三郎　▽副会長　出口林次郎、馬場太郎　△理事長　高嶋冽　▽常務理事　的場、徳永、松本、山岡、吉田、若崎、田中秀夫（38年度のみ）

【第13期＝昭和40・41年度】
▽会長　式場隆三郎（40年11月まで）▽会長代理　鈴木達雄（41年3月から）▽副会長　出口林次郎（40年6月まで）、馬場太郎、鈴木達雄、小杉仁造　▽理事長　高嶋冽（41年12月まで）▽常務理事　的場、徳永、松本、山岡、吉田、若崎　山田計、宮崎顕一郎（41年12月まで）、加藤祐策（同）、青木近衛、岡村昭二、境井秀三、入江暢一、栗脇凝、浜田猪三郎

（注）各期とも名簿中は敬称略。常務理事のうちフルネームは新任または復帰をあらわします。

各都道府県 沖縄 協会一覧表 4月20日現在

	会長	各協会所在地	電話
北海道	徳中康満	北海道幌別郡登別町字来馬169 登別高校	
青森	鹿内一胤	青森市浪打100 県立青森商業高校	青森（4）5426 5427
秋田	武田兼治	秋田県湯沢市新町 湯沢高校	湯沢 2280
岩手	菊池慶一郎	盛岡市本町通り3—16—1 岩手医科大学教養部体育研究室	（2）5111
宮城	松川金七	仙台市川内 東北大学教養部体育研究室	（23）1181
山形	市村利兵衛	山形県東根市大字東根丁177 県立東根工業高校	
福島	三瓶勝治	郡山市方八町2—6—9 熊田栄一気付	
群馬	保坂梅雄	富岡市七日市1500 県立富岡高校	富岡 53
栃木	長竹寅治	足利市本城1—1629 県立足利高校	（2）4573
茨城	染谷秋之助	水戸市渡里町 茨城大学体育研究室	（2）4171
埼玉	藤間英一	浦和市元町1—255 浦和市立高校	（31）2395 4417
千葉	安田敬一	千葉県佐原市佐原イ861 佐原女子高校	
東京都	渡辺和美	東京都品川区東五反田2—2—7 大崎電気工業（株）	（441）2110
神奈川	保坂周助	横浜市南区三春台4 関東学院気付	（23）1001
山梨	米山泉	山梨県東八代郡石和町中川 県立山梨園芸高校	石和 130
新潟	近藤祿郎	柏崎市東本町1—6—8 佐渡五旅館気付	柏崎 2325
長野	鈴木俊	上田市新参町 上田市教育委員会内 社会教育課	（2）4100
静岡	斉藤敏之	清水市入江岡975 清水市立商業高校	（2）7330〜1
岐阜	山内清次	岐阜市加納三笠町2—19 （株）常盤工業内	
愛知	小杉仁造	愛知県知多郡横須賀町 高横須賀広脇 県立横須賀高校	
福井	伊藤仁和	福井市板垣町29 羽水高校内	（24）5178
石川	油谷外郷	金沢市田井町 兼六中学校	
富山	高田義一	富山市新総曲輪二番32号 富山県経済農業連合会	（41）1151
三重	田村正衛	三重県津市柳山津興 津実業高校	（8）6217
滋賀	嶋田栄一	彦根市金亀町 彦根東高校	
京都	木下弥三郎	京都市北区紫野下御輿町12—1 岩本定男気付	（44）9894 （45）6161
奈良	堀内俊夫	奈良市高樋町498 森田正英気付	
和歌山	中村常夫	和歌山市豊原町1—1 桐蔭高校	（22）4718 （23）1147
大阪	野原博彦	大阪市住吉区帝塚山西4丁目55 大阪市立住吉中学校	
兵庫	郷田兼宏	明石市大蔵天神町21番14号	明石（912）0222〜4
岡山	村山寛	岡山県真庭郡落合町垂水 県立落合高校	
広島	川上正幸	広島市若草町広島駅北口（株）いとうや	（62）0985
山口	近間忠一	山口市糸米 山口高校	
島根	青山善平	松江市乃木福富町 島根農科大附属高校	
鳥取	安田光昭	鳥取県境港市上道町821 県立境高校	境港 2342
香川	森住雄	高松市桜町2丁目5—10 高松第一高校	（3）3853 9515
愛媛	松浦瞕一	松山市大字石手509—2 越智武気付	
高知	河淵正実	高知市追手筋七 高知追手前高校	（3）6141〜3
徳島	久木武夫	徳島市沖の洲北新田1—119 徳島市立高校	
福岡	岡野正実	福岡市香椎町 県立香椎高校	（68）0009
佐賀	渡部保	佐賀市北川副町木原 佐賀東高校	（4）0141
大分	中尾節次	大分県東国東郡国東町 県立国東高校	国東 27 40
長崎	中部長二郎	長崎市文教町 長崎大学教育学部	
宮崎	野瀬良胤	都城市妻ケ丘町第27街区第15号 都城泉ケ丘高校	
熊本	佐々木克己	熊本市黒髪町坪井 済々黌高校	（64）1773 6301
鹿児島	増田静	鹿児島市草牟田町3918 鹿児島工業高校	（2）9205
沖縄	仲田豊順	沖縄糸満町 糸満高校	

地方だより

寄稿歓迎

三菱、大崎（女）破り優勝
初の関東実業団選手権

このほど結成された関東実業団連盟は、その第1回選手権を3月25・26日横浜・文化体育館で開き男子は全日本実業団の覇者大崎電気（埼玉）、女子は進境著しい三菱鉛筆（神奈川）が優勝した。

▽男子（トーナメント）1回戦
和同建設（神奈川）29（18－12 11－14）26 自衛隊体育学校（埼玉）
日立製作所（茨城）24（13－12 11－9）21 光電工業（群馬）
千代田印刷機製造（東京）21（12－4 9－10）14 日進商会（神奈川）
原子力研（茨城）39（20－4 19－5）9 日本発条（神奈川）
パイロット平塚（神奈川） 不戦勝 安田生命（東京）

▽準々決勝
大崎電気（埼玉）53（28－3 25－6）9 和同建設
千代田印刷機製造 26（16－11 10－4）15 日立製作所日立
自衛隊勝田（茨城）44（21－7 23－3）10 パイロット平塚
日本鋼管（神奈川）29（13－7 16－3）10 原子力研究所

▽準決勝
大崎電気 27（14－5 13－11）16 千代田印刷機製造
自衛隊勝田 30（17－10 13－6）16 日本鋼管

▽決勝
大崎電気 24（12－10 12－5）15 自衛隊勝田

【大崎】

	氏名	得
GK	福本	0
GK	下里	0
FP	金田	4
FP	北村	3
FP	井上	5
FP	西村	2
FP	竹野	1
FP	近藤	8
FP	片山	1
FP	加藤	0

【勝田】

	氏名	得
GK	会沢	0
GK	貝谷	0
FP	阿部	0
FP	平山	0
FP	奥	7
FP	福井	2
FP	平地	1
FP	富永	0
FP	根本	0
FP	新山	5
FP	日高	0

15（1）7MT（0）24

▽女子（リーグ）
三菱鉛筆（神奈川）18（7－1 11－2）3 レナウン（東京）
大崎電気（埼玉）19（10－2 9－1）3 レナウン
三菱鉛筆 8（2－3 6－1）4 大崎電気

【三菱】

	氏名	得
GK	吉田	0
GK	飯塚	0
FP	三井	2
FP	鈴木	0
FP	佐々木房	2
FP	落合	0
FP	佐々木洋	0
FP	江川	2
FP	蓮見	1
FP	本庄	0
FP	阿部	1

【大崎】

	氏名	得
GK	川崎	0
GK	山田	0
FP	早川	1
FP	加藤	0
FP	鈴木	3
FP	小林	0
FP	栗林	0
FP	木幡	0
FP	山崎	0
FP	神藤	0
FP	久保田	0

4（0）7MT（0）8

〔評〕 男子15チーム、女子3チームが参加した。第1日の女子で三菱が大崎を破って優勝するなど話題・活気ともになかなか豊富だった。

女子決勝三菱－大崎は、三菱が前半2－1から佐々木房、江川の活躍で一挙に引きはなした。大崎は後半4分鈴木のゲットで6－2としたまでで点差をつめることが出来ず三菱が会心の攻守で勝利を飾った。

男子は、近藤、片山（ともに芝浦工大出）を加えた大崎が順当勝ち。

しかし自衛隊勝田の体力、千代田印刷機製造、日進商会の攻守もトップクラスの力を見せ、点差の割に好内容のゲームが多かったのは喜ばしい。レベル向上の一策として順位に関係なく敗者同士のコンソレーションマッチがプログラムに織りてまれて運営されていたのはよいアイディアだ（杉山）

中京ク、清新の進出
東海室内で優勝飾る

第6回東海室内選手権は2月18日静岡県営草薙体育館に東海四県の予選勝者が集まり開かれた。

男子は昨年まで2連勝の桜丘会（愛知）が予選で敗れ。初優勝を狙う四者の接戦となったが、創立2年目の中京ク（愛知＝中京商0B）がすぐれた個人技で実業団二強を倒し優勝。

女子は田村紡（三重）が3連勝を飾った。

▽男子準決勝
常盤工業（岐阜）18（8－3 10－3）6 清水橋ク（静岡）
中京ク（愛知）15（9－6 6－4）10 本田技研（三重）

▽決勝
中京ク 18（10－7 8－8）15 常盤工業

【中京】

	氏名	得
GK	戸田	0
FP	深谷	1
FP	餅原	2
FP	牧	6
FP	西尾	4
FP	安藤	5
FP	足立	0
FP	竹内	0
FP	横井	0
FP	宇津野	0

【常盤】

	氏名	得
GK	渡辺	0
FP	中島	1
FP	高橋	6
FP	片岡	1
FP	桃井	0
FP	吉金	5
FP	鳥村	2
FP	峰岸	0
FP	西洞	0
FP	赤堀	0

15（1）7MT（3）18

▽女子準決勝
愛知紡（愛知）9（4－1 5－4）5 静岡城北ク（静岡）
田村紡（三重） 不戦勝 大垣南岑会（岐阜）

▽女子決勝
田村紡 11（9－4 2－4）8 愛知紡

【田村】

	氏名	得
GK	渡辺美	0
FP	種村	2
FP	渡辺好	0
FP	水谷	3
FP	小林	3
FP	内藤	3
FP	清水	0

【愛知】

	氏名	得
GK	尾崎	0
FP	小林	4
FP	五十嵐	0
FP	小野	1
FP	関口	0
FP	高村	0
FP	近藤	0
FP	前田	3
FP	黒木	0

8（0）7MT（2）11

〔評〕 男子桜丘会、清商ク（静岡）が予選で敗れ、新鮮な顔ぶれとなりしかも初登場の中京クが本田技研（東海屋外 選手権優勝）、常盤工業（東海実業団優勝）を連破してナンバー・ワンの座についのだから、東海球界に久々に新風が吹きこんだ印象をより強めた。実業団二者は全国日本実業団選手権終了直後で調子の波が低いときにぶつかり、チーム力をぞんぶんに発揮できぬまま敗れた。

女子は、第一戦を不戦勝ちした田村紡が、決勝では体が冷え切ったためか得意の速い動きがまったくみられず、ハーフタイムもランニングするありさま。この不調を愛知紡がよくついて後半5分には6―2とリードした。

しかし、自信にあふれる田村紡はあわてず、早いつぶしで愛知紡の追加点をはばみながら、じわじわと迫り、12分6―6と追いついた。一進一退のあと18分水谷の好技で9―8と逆転、2点を加えて押し切った。これで対愛知紡に一引き分けをはさみに12連勝。

愛知紡はひところの低調は脱したがまだ不安定。城北クに苦戦したのもその現われだ。決勝の後半開始直後に見せたようなシャープさが身につけばシメたものだろう（杉山）

氷見ク、今年も快勝

▼第6回富山県室内選手権（1月・富山市体育館）

▽一般男子準決勝

高岡三日会 22―17 高岡商OB

永見ク 15―10 富山大

▽同決勝

永見ク 21（10―2、11―4）6 高岡三日会

▽一般女子準決勝

高岡女OG 5―3 県富女OG

永見ク 9―6 富山北OG

▽同決勝

高岡女OG 10（7―3、3―6）9 永見ク

▽高校男子決勝

永見 14―7 富山工

▽同女子決勝

高岡女 15―0 小杉

桜丘会が2連勝

▼第2回愛知クラブ・リーグ（3月、名古屋）

▽一部順位①桜丘会4戦全勝②愛工ク3勝1敗③名大ク1勝2敗1分④瑞陵ク1勝2敗1分⑤一宮ク4敗

▽二部順位①東杏会4戦全勝②東山ク3勝1敗③愛商ク2勝2敗④名古屋高等無線学校1勝3敗⑤松蔭ク4敗

一部最下位の一宮クラブと二部一位の東杏会の間で入替戦があり東杏会が一部に進出した。

首里（男子）・興南（女子）が優勝

▼第1回全沖縄高校選手権（41年12月3・4日小祿高校）

▽男子決勝

首里B 6（1―4、5―1）5 小祿

▽女子決勝

興南 5（3―2、2―2）4 小祿

三菱鉛筆二連勝

▼第3回東北総合室内ハンドボール選手権（1月28・29日仙台市）

▽一般男子準決勝

東北学院大 16―13 湯沢高

福島教員 34―15 大石田高

▽同決勝

東北学院大 28（15―8、13―11）19 福島教員

▽一般女子準決勝

小高農高 11―3 花巻農高

三菱鉛筆 13―2 湧谷高

▽同決勝

三菱鉛筆 7（3―4、4―1）5 小高農高

女子は加納クラブ初優勝

▼第8回岐阜県総合室内ハンドボール選手権（2月11・12日岐阜）

▽一般男子準決勝

常盤工業 25―8 大垣北高

全岐阜西工高 21―17 岐阜教員

▽同決勝

常盤工業 18（11―2、7―3）5 全岐阜西工高

▽一般女子準決勝

加納クラブ 4―3 大垣南岑会

大垣南高 2―0 加納高

▽同決勝

加納ク 7（4―1、3―1）2 大垣南高

教員が優勝

▼福井県室内総合ハンドボール大会（2月25・26日羽水高）

▽一般男子準決勝

教員 15―6 若狭OB

若狭 12―6 北電

▽同決勝

教員 9（5―3、4―2）5 若狭

▽一般女子決勝

福高 10（5―2、5―2）4 福井

上田高クラブ優勝

▼長野県総合室内ハンドボール大会（1月28・29日佐久市）

▽一般男子準決勝

北農ク 12―9 上田高校

上田高ク 24―7 坂城OB

▽同決勝

上田高ク 20（5―9、7―3、4―2、4―4）18 北農ク

▽一般女子決勝

小諸商校 19（10―3、9―7）10 小商浅間会

桐蔭高が進境

▼和歌山県高校新人戦（2月・御坊商工）

▽男子準決勝

和歌山高 16―3 御坊

桐蔭 13―7 那賀

▽同3位決定戦

御坊 10―8 那賀

▽同決勝

桐蔭 12（6―4、6―5）9 県立和歌山商

▽女子リーグ

和歌山 8―4 和歌山商

御坊商工 9―6 和歌山商

御坊商工 7―5 和歌山

編集後記

ハンドボール協会の執行部も新しくなった。かなり新旧交替した面もある。会長、理事長・普及部長・技術部長・審判部長みなさん「新」の字のつく人々に強引に原稿をいただいた。みんな希望に溢れた原稿を書いてくだすった。しかし新しい仕事、不安がない訳ではないようだ。大いに協力してハンドボールをやっていきたい。

今月から雑誌の編集をすることになった。従来、雑誌の編集をしていただいた鷲尾さん、佐内さん本当にありがとう、御苦労さまでした。心から感謝しています。これからもいろいろやっていただくでしょうが、どうぞよろしくお願いします。杉山さん、今月号大変良い原稿を沢山ありがとう今後もよろしく。

編集も地方の方々に入っていただいて、各地各地のたよりを沢山もりこんでいきたいし、投書欄も設けたいと思っている。馴れないことなので、ミスもあると思うけれど、どうか暖い眼で見守り、どしどし批判、叱正を賜りたいと考えている。原稿だけでなく、写真図もどしどし送っていただきたいと考えている。みんなの「ハンドボール」を作るため、協力を切にお願いしたい。（T.S.F.）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール
第四十二号
昭和四十年六月 第三種郵便物認可
昭和四十二年四月二十五日印刷
昭和四十二年五月 一 日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南町二五
電話 大代表(467)三二一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 鈴木達雄
定価 百五十円